

42649

教科書文庫

4

810

51-1941

20000
34759

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

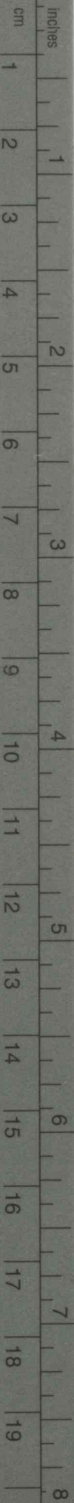


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

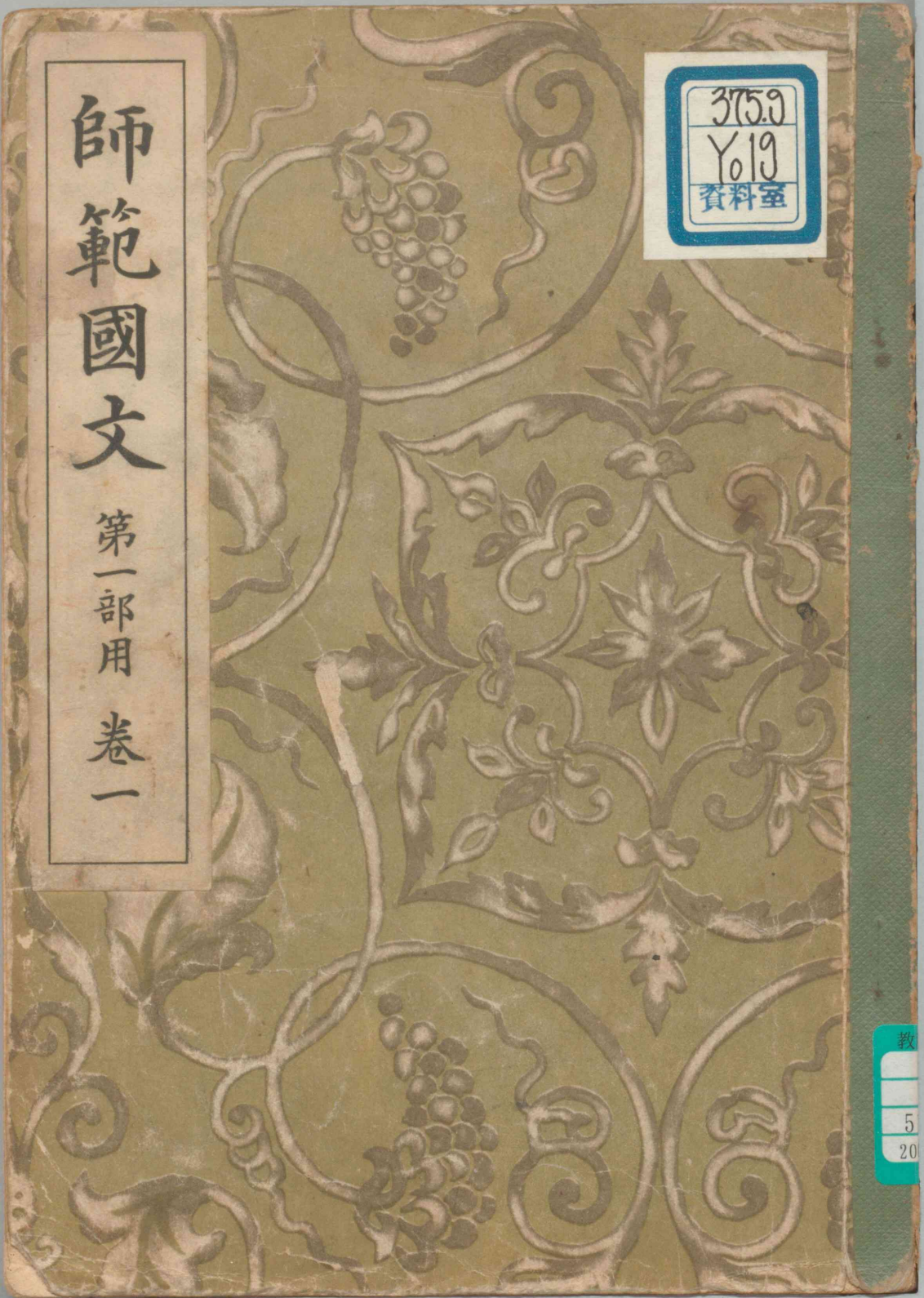
© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Y619
資料室

師範國文

第一部用卷一



教科書文庫

4

810

51-1941

2000034759

資料室

375.9
Y019

文部省檢定濟

昭和三十六年十二月十一日 師範學校國語教科用科

師範國文 第一部用

吉田彌平編
石井庄司補訂

東京 光風館藏版

修正三版

広島大学図書

2000034759



廣島大學
圖書印



例言

本書は今回改定せられました師範學校教授要目に準據し、師範學校第一部用の國語科講讀用教科書として編纂したものであります。本書は現代文を經とし、各時代の代表的文學を緯として特に師範教育の精神に適合するやうに組織いたしました。そして最後に國文學史の大要を示してこれを總括する仕組にしました。本書の全卷を通じてその基調となつてゐるものは實に我が國文學を貫き流れる崇高な日本精神であります。特に時局に鑑み、國體觀念の明徴、敬神崇祖、忠君愛國、義勇奉公の精神の涵養に關して深く意を致しました。本書の用字、假名遣、句讀點などはつとめて國定小學讀本の例に準據いたしました。國定小學讀本の中に見えてゐる童話傳説史話物語などについては、

成るべくその原據を採録することにした。地圖・繪畫・寫眞などで本文の理會に必要なものは、成るべく挿入いたしました。肖像や筆蹟なども古今の賢哲名流を偲ぶよすがになるものは、つとめて取入れました。

各課の題目の下には作家の氏名又は雅號を記し、文の終には出所を示して置きました。編纂の都合で、原文の姿のかはつて來たものは唯その據る所を記すことにいたしました。

原文に對しては十分の敬意を表して居りながら、なほ多少の手を加へて體裁を整へねばならぬことのありましたのは、甚だ不本意であります。が、本書の性質上まことに已むを得ないことであります。この點に關しては偏に諸家の寛恕を冀ふ次第であります。

昭和十二年十一月

編者識す

補訂に就いて

本書を、補訂するに當りましては、編者の本書編纂に對する主義方針を踏襲し、更に若干の新意を加へ、以て一層の完璧を期しました。

昭和十三年三月

補訂者識す

師範國文 第一部用 卷一

目次

一	國華	平泉 澄一
二	菊の香	石井國次 七
三	鵬程一萬五千籽	飯沼正明 六 塚越賢爾 六
四	比叡の鳥	高濱虚子 五
五	平安京	藤岡作太郎 五
六	新月	北原白秋 五
七	敵艦見ゆ	水野廣徳 七
八	三つの肉弾	小笠原長生 八

目次

一

九 爆彈下の小學校

一〇 童謡四首

ひかうき

親牛子牛

いなご

猿の猿真似

一一 舌切雀

一二 鳥居勝商

一三 豊臣太閤

一四 瑞竹の林

一五 鶏

一六 文章の道

下位 春吉 五

葛原 齒毛 七

西條 八十五

河井 醉茗 六

野口 雨情 六

〔赤本舌切れ雀〕 六

湯淺 常山 七

三上 參次 七

薄田 泣菫 九

島崎 藤村 七

一七 槍岳へ

一八 九十九里濱

一九 田家の朝

二〇 東國武士

二一 青の洞門

二二 故郷

二三 おもひで

二四 立志

二五 オリンピック

二六 スポーツマンシップ

二七 氷川清活

二八 南洲遺訓

芥川龍之介 一〇四

徳富健次郎 一二四

相馬 御風 一三三

萩野 由之 一六

菊池 寛 一三五

正岡 子規 一五〇

新井 白石 一五

室 鳩 巢 一三

山 川 建 一七

辰 野 保 一七

勝 海 舟 一八〇

西郷 南洲 一八六

目次 終

廣島大學
圖書之印

師範國文 第一部用 卷一

平泉澄

國史家

文學博士

東京帝國大學

教授

明治二十八年(三

五)福井縣生

木花咲耶姬

大山津見神の女

天孫瓊杵尊の

御妃

一國華

平泉澄

日本人の最も愛し來つた花は櫻である。古くは單に「木の花」といつて直ちに櫻の花をさしたことは、木花咲耶姬の御名からも考へられる。尤も支那文化全盛の時には、一時梅や牡丹をもてはやしたこともあり、西洋文明心酔の世には、暫く薔薇やダリヤを賞したことがあつても、それは時代の流行を追ひ、風尚の變遷につれての一次的傾向に過ぎない。結局するところ、櫻の花に對する日本人の愛好は、永久に動かすことが出來ないのである。

本居宣長

國學四大人の一
伊勢國(三重縣)

松阪生

享和元年(1801)

卒

年七十二
贈從三位

佐久良東雄

勤王家

國學者

常陸國(茨城縣)

生

萬延元年(1850)

卒

年五十

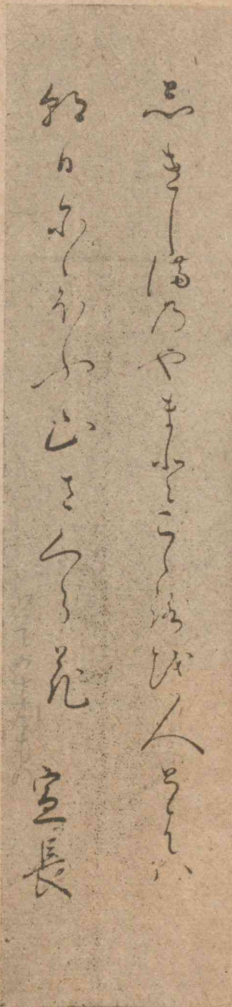
贈從四位

天保十二年

仁孝天皇の御代
(1841)

思ふに、櫻の花と日本精神との間には極めて微妙な一致點があつて、いはば櫻の花こそは日本精神の象徴ともいふべきものである。本居宣長が、

敷島のやまとごころを人間はば朝日ににほふ山櫻花



本居宣長筆

と歌つたのは、正にこの間の消息を道破したものである。佐久良東雄といふ人は、元來僧侶であつたが、天保十二年、三十一歳の春、深く感ずる所あり、慨然として還俗し、純粹の日本人たらんことを期して、名を佐久良東雄と改めた。佐久良は櫻である。純

粹の日本精神に立ちかへる時、人は櫻の花を聯想せずにはゐられないのである。姓にさへ附ける程であるから、東雄には櫻の花を詠じた歌が澤山ある。

天つ神いかなる神のこゝろよりさくらのはなは咲かせ
そめけむ

朝日かけ豊榮のぼるみよになりて櫻のはなを咲かせて
しがな

千五百年むかしの御代に生まれなば櫻かざしてわれも
あそばむ

などと歌つてゐるが、殊に勝れてゐるのは、
事しあらばわが大君のおほみため人もかくこそ散るべ
かりけれ

實情も深く
痛切な
歎息も
つとむす

野矢常方
國學者
會津藩士
明治元年(五三)
歿
年六十七
櫻井
攝津國(大阪府)
三島郡島本村櫻
井

といふ一首である。これは櫻の花の散りぎはのいさぎよきを
見て、感歎に堪へず、一旦緩急あらば、天皇の御爲には我等も亦こ
のやうに潔く散つてゆかなければならないと痛感して詠じた
ものであらう。

こゝまで來ると、櫻の花と日本精神との關係は一段と深刻切實
になつてくる。櫻の花を見て、たゞその美はしさに恍惚となつ
てゐるのではない、時節到來してさあつと風に散りゆくその散
りぎはの潔さを喜ぶのである。野矢常方が

我が子には散れと教へておのれまづあらしに向かふ櫻
井のさと

と歌つたのも、この精神である。こゝまでくると、櫻の花は日本
精神の殊に深刻切實なるもの、即ち武士道と相通ずるに至る。



筆川伊野狩 關來勿

ケイベル
 獨逸の哲學者
 音樂家
 東京帝國大學文
 科大學教師
 横濱で歿した
 (西曆一八五一年三
 月)

哲人ケイベルは



はかなきを見るのである。

一 國 華

櫻の花の頃こそ日本人を観察す
 べき時である。これその牧歌的
 哀歌的なる天性の最も明らかに
 現れる季節だからである。絹の
 如く柔かなる華奢なる澹泊なる、
 短命なる櫻の花こそ、實にその象
 徴である。日本人はこの美しき
 花の、束の間に萎み、さうして散り
 ゆくその中に、わが生の無常迅速
 なる譬喩を見、我が美と青春との
 櫻の花を眺めてゐる時、春のたゞ

たゞし

たゞし
 たゞし
 たゞし

たゞし

小泉八雲
もと英國人でラ
フカヂオハーン
といつた
詩人
東京帝國大學文
科大學講師
明治三十七年三
月卒
年五十五
贈從四位
(西曆一八五〇—一九
三)

口筆と日本
精神と相通
する。

中に、秋の氣分が彼の胸に忍び入る。
といつた。さすがは小泉八雲等と相並んで、最も深く日本を愛
し、最も善く日本を理解した人だけあつて、實に見事に櫻の花に
對する日本人の感情をとらへたものといはなければならぬ。
然り、たしかに日本人は、櫻の花を見て、その忽ちにして散るを思
ふのである。その風に散る散りぎはの美しさを思ふのである。
そして人も亦かくの如く美しく咲いて美しく散りゆくことを
希望するのである。美しく咲くことの心にまかせぬとしても、
せめては美しく散ることを冀ふのである。どうせ散る命では
ないか。惜しんでも百年の壽命は保たれないとすれば、惜しむ
ところなく花と散らう。
こゝに櫻の花を愛づる心は直ちに勇往敢爲、死して悔ゆるとこ

石井國次
教育家
學習院名譽教授
宮中顧問官
明治七年(三五四)
茨城縣下妻町生

ろなき武士の精神に繋がる。「花は櫻木、人は武士」とは、古くから
世にいひはやされた諺であるが、花に四季の草木、色と匂いの
趣はあつても、結局櫻の花を第一とする日本人は、この花をめづ
る心の一派直ちに繋がるどころ、武士といふものを日本人の特
性の最も鮮かに發揮せられたるものとして、これを誇つたので
ある。それゆゑ櫻の花を國華とするならば、武士道はやがて日
本精神の精髓だといはなければならぬのである。(日本精神講座)

二 菊の香

石井國次

我が天皇陛下の允文允武におはしまして、萬民の上に君臨せら
るべき聖徳を具へさせ給ふことは申すも畏きことながら、御幼
少の砌學習院御在學中の御事どもを拜し奉るにつけても、洵に

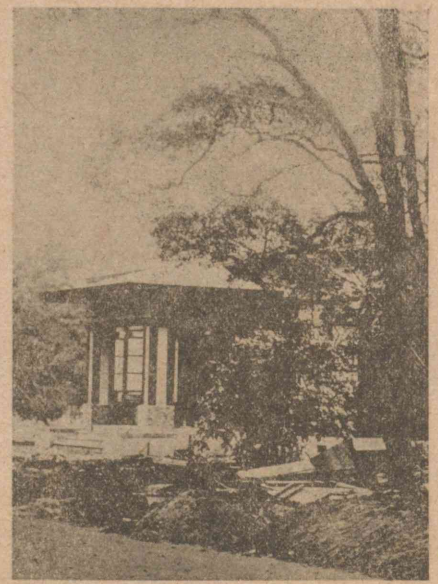
感佩に堪へぬことが多いのであります。

まづ第一に驚嘆し奉るは、御記憶の拔群にあらせられることとあります。私は今まで多くの學生に接して参りましたが、陛下のやうに御記憶の強いお方は見受けたことがありません。蟲の名でも貝の名でも聯絡も系統も無い事まで、一度御覚えになつた以上は決して御忘れになるといふことがありません。

かく御記憶の拔群な上に、御研究心が非常にお強く、何でもいゝ加減にして置く事が御嫌ひで、詳細に御質問になり、又御自分で徹底的に御研究になるのであります。例へば歴史で聖徳太子の事を申し上げると、御歸りになつて参考書を御調べになり、聖徳太子の憲法とはどんなものか、三寶とはどういふ事かと御研究になる。理科で蝶の御話を申し上げると、蝶類圖説を御調べ

三寶
佛法僧
聖徳太子の憲法
の第二條に「篤
く三寶を敬へ」
とある

になつたり、盛に御採集になつたりして、日本産の蝶は勿論、外國産のものまでも御觀察になる。或は電氣の御話を申し上げれば、種々の機械を御取



宮城内生物學御研究所

寄せになつて御實驗遊ばされ、無線電信電話の事まですつかり御理解になるといふ風であります。旅行登山の御趣味も御豊

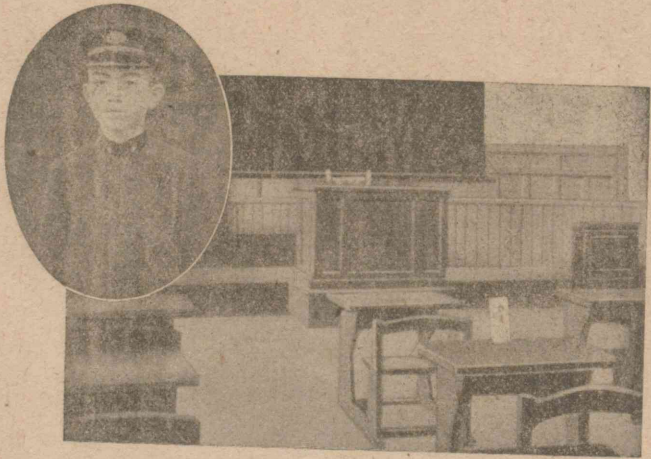
富にあらせられ、單なる御運動としての外に、地圖や案内記をよく御調べになり、其處の産物や動物、礦物から氣象の事まで熱心に御研究になる。萬事がかやうな風であらせられますから、御

明治神宮
明治天皇昭憲皇
太后を奉祀する
官幣大社
東京市澁谷區代
代木に鎮座

知識の確實で且深みのあらせられる事は、實に驚嘆し奉る外は
ありません。

明治神宮に参拜して明治天皇の日常御使用になつた御調度品
を拜觀した者は、誰でも其の御質素に感泣しないものは無いで
せうが、陛下も亦其の高風を傳へさせられたのでありませうか
華美が御嫌やであらせられます。それですから、御學用品等も
全く一般學生と同様な品を御使用になり、鉛筆などは當時一錢
五厘の鷲印のを好んで御使用になりました。而もそれがごく
短くなるまで決して御棄てになりません。消ゴムも當時四五
錢位のを、豆粒程になるまで御使用になり、雜記帳でも、半紙
や畫用紙でも、決して無駄には遊ばしませんでした。それで、大
正三年三月陛下が初等科を御卒業あらせらるゝや、御高德を一

般兒童に拜せしめたならば國民教育に裨益する所があるのだら



御影と學習院御教室

うと考へて、陛下の御使用にな
つた背囊、教科書、雜誌、筆入から
帳面、鉛筆、ゴム、並に御製作にな
つた手工品、圖畫標本等を拜借
して一室に陳列し、御教室、御控
室等すべてを公開して、一週間
に亙り、市内及び近縣の小學兒
童に拜觀せしめたことがあり
ます。其の時、毎日何千といふ
兒童が校長、教員につれられて
参り、私どもは手別けをして種々説明を致したのであります。

たしか京橋か日本橋あたりの學校と思ひますが、女の子でかなり綺麗な服装をして幅の廣いリボンなどをつけて來た一組がありました。私が其の女生徒たちに説明をしてから、皆さんは、殿下でさへかやうに御質素であらせられる事を拜見したら、もう綺麗な衣裳だの、幅の廣いリボンだのをねだることは出來ないでせうね」と申したら、たいそう感激して泣いた生徒が随分ありました。

陛下は又非常に規律正しいことが御好きであらせられます。朝の御起床から御拜御食事御通學御復習御運動御入湯御寢まで、實に規則正しい一日の御日課を御守りになつて、御變更になる事は容易にありませんでした。従つて色々の事を遊ばすにも、すべて規則正しい御計畫をお立てになつて、組織的に遊ばす

といふ風であらせられます。

陛下はまた實に公平無私であらせられます。例へば戦争ごつこをやつたあとで、私が其の審判や講評など致します時、御自分の方に不利な事がおありになつても、少しもお包みなく御申出になる。角力で陛下が相手をお投げ遊ばされて、軍配が御自分に揚つても、行司の氣附かなかつた少しの踏切などが御自分におありになると、私に踏切があつたから負です」と御主張になる。審判者や行司が少しでも不公平な判定をすると、非常に御嫌ひになる。仲間の者が、其の方が御都合がお宜しいではございませんか。などと申し上げると、そんな不正直な事はいけない」と仰になる。従つて、歴史上の事柄を御批判遊ばされるときなど、實に理路井然、公明正大で、よく大局から斷案をお下しになる。實

に陛下の御心は少しの曇もない明鏡であらせられます。それゆゑ陛下の御心鏡の前に立つては、正邪善惡の姿がはつきりと顯れて、隠すことは出来ないであります。

陛下は非常に御仁心が深い。どちらかと申せば御口數の少い方で、御世辭などは仰せられないが、誠に思ひやり深くあらせられます。従つて御幼少の時分から、普通の子供に有りがちな友達にからかふとか、意地悪い事をするとかいふやうなことは決しておありになりませんでした。そして御學友に對しても、御側の者に對しても、好き嫌ひといふことが全くなく、一視同仁で、公平に御愛しになります。侍従や侍從武官などにも、新舊の差別なしに優しく御接しになるさうです。而も舊い人をいつまでも御忘れにならず、元の侍女や御學友などが御伺ひ申すと、

大變に御喜になりますし、時々トキトキの御召もあります。私どもにもやはり其の通りで、東宮の御頃までは御誕辰其の他の御祝には御召があり、御機嫌伺に出れば、特別に拜謁を許され、御暇御暇の時は何時までも御引止めになつて御言葉を賜ふのであります。

先年御外遊の御時には、私はロンドンやパリで御迎へ申し上げましたが、屢、御召を蒙つて御陪食を賜はり、内外諸名士の前でも、先生、先生と仰せられるので、覺えず、無上の光榮に感泣した次第であります。人心がだんく、荒んで師恩を忘れるどころか、全くこれを念頭におかないやうな青年子弟の多い今日、陛下のかかる御態度は、實に貴い御模範ではありますまいか。

陛下の御盛徳を稱へ奉ることは、到底私どもの能くするところではありませんが、要するに陛下は御天性實に間然する所の無

飯沼正明

一等操縦士
大正元年長野縣
生

塚越賢爾

機關士

明治三十三年(三
義)群馬縣生

グリニッチ時間

英國グリニッチ
天文臺を通過す
る子午線によつ
て定めた時間

亞歐連絡記録

飛行

朝日新聞社の企
てとして行はれ
た飛行

昭和十二年四月
六日東京立川陸
軍飛行場を出發
し南方コース一
萬五千三百五十
七斤を翔破して
十日ロンドンの
クロイドン飛行
場に到着した

い御方で、現つ神としての神々しい御性格を先天的に御具へあ
そばしていらせられると申し奉るよりほかはありません。
(教育研究)

三 鵬程一萬五千斤

飯沼正明
塚越賢爾

グリニッチ時間四月九日午前五時三十五分離陸。本日は亞歐
連絡記録飛行鵬程一萬五千斤の最後のコースであるので、アテ
ネの旅舎でゆつくり休養をとつた。疲労しきつた顔で、伸びき
つた穢い髯面をして目的地に到着することはいやなので、風呂
で體を洗ひ、新しいシャツを着、容姿を整へて「神風」に乗りこんだ。
山峽の飛行場は北風が強い。飛行場の上で高度をとり、雲の上
に出る。丁度日本の中部山脈の上を飛ぶやうに高度二千米位

所要時間九十四
時十七分五十六
秒

コース

道程

アテネ

ギリシヤの首府

神風

この飛行に用ひ
た機の名

東久通宮殿下の
御命名

ケルキラ島

ギリシヤの西北
岸にある島

ギリシヤ領

タラント

伊太利南部の海
港

アベニン山脈

伊太利半島の香
梁山脈

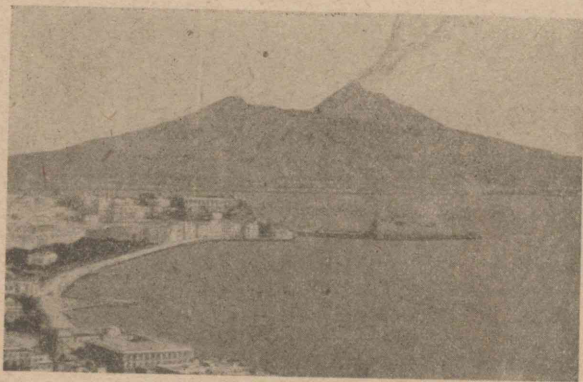
ベスピアス

伊太利南部
ナポリ灣に臨む
活火山

の山が續いてゐるが、大半は雲に隠れて見えない。偏流十五度
眞横の風であるが、向かひ風でないのが有難い。六時四十二分
ケルキラ島を通過、高度三千米。希臘を離れて伊太利に向かふ。
雲は切れ、汽船も走つてゐる。海上波も靜かだ。
七時縁滴るやうな伊太利半島の長靴の踵が視野に入つて來た。
氣流、天候もよく、神風は相變らず健康そのものの爆音を立てて
ゐる。體もあまり苦しくない。七時二十二分タラントの港を
右に遠く見る。これからそろ／＼アベニン山脈にかゝる。七
時四十分、心配してゐたこの山脈にも雲が所々にかゝるのみで、
絶好の飛行日和である。残雪のある高い山々は、青葉の六月頃
の裏日本の飛行を回想せしめる。
午前八時ベスピアスの緩やかな煙を左前に望む。繪のやうな

ナポリ
伊太利の有名な
港市
ローマ
伊太利の首都

杉村大使
當時の伊太利駐
刺特命全權大使
法學博士
杉村陽太郎
昭和十四年歿



ナポリとベスピス火山

ナポリを通過、ローマも近い。伊太利の風景は日本のそれによく似てゐるが、家や街が白く美しい。八時四十七分ローマへ来た。飛行場に水溜が見えるので、二回三回旋回して着陸したが、接地した途端に水煙を揚げてしまつた。近代式の歐洲の飛行機が澤山並んでゐる。大勢の人たちに大歓迎を受ける。杉村大使が肥つた體で汗だくになり、色色とお世話して下さる。「狐は河を渡り終る時に尾を濡すといふ。今度が最後のコースだ、くれぐれも注意しなさいよ。」と本當に親切的な御注意を受ける。さうだ、我々はロンドン

プロペラ
飛行機用推進機

コルシカ島
地中海の北部に
ある島
佛領

アルプス
南部ヨーロッパ
にある大山脈
カンヌ
フランスの東南
端にある都市

マルセイユ
地中海岸にある
フランス第一の
貿易港

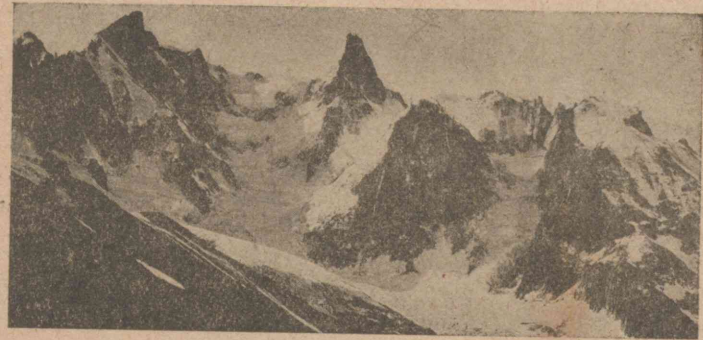
ンで「神風」のプロペラが廻轉を止めるまで安心出来ないのだ。雨上りで飛行場がぬかるので離陸困難を告げると、伊太利の人たちが氣の毒がつて、陸軍機を三機も出して誘導してくれる。飛行場を一杯に滑走して離陸、海上をコルシカ島の北端に針路をとる。コルシカ島には三千米近い山が雪を載いてそり立ち、氣流も少々悪い。十一時四十分海上に雲の渦巻を見る。地中海の雲がアルプスの麓のこの海上で渦巻いてゐるのであらう。午後一時十分カンヌの南を左下に見てフランスに上陸、マルセイユの北方へ向かふ。薄い靄がかゝつて、視界はあまりよくない。



コルシカ島の神風

ローヌ河
フランス南部の
大河
リヨン
パリの東南にあ
る大都市

十二年前の飛行
大正十四年朝日
新聞社の訪歐飛
行が行はれ初
風・東風の二機
がシベリヤ經由
で露・獨・佛・白・
英・伊諸國を訪
れた



大のアルプス

ローヌ河の溪谷を北上してリヨンも間近な頃、右手にアルプスの大景觀が展けて來た。眞白い雪を戴いてゐる連続せる王座。我等の筆舌でどうしてその美觀を表現出來よう。これほど偉大で壯快な眺望を恣にするこゝが出来ただけでも苦しい思をして飛んで來た價值があつたと思ふ。午後二時二十分リヨンを通過、アルプスを背にしてパリに向かふ。パリ無電局から長文の電報を送つて來る。

「お目出たう。我々は君等を歓迎する。十二年前の飛行を思ふと感慨無量の

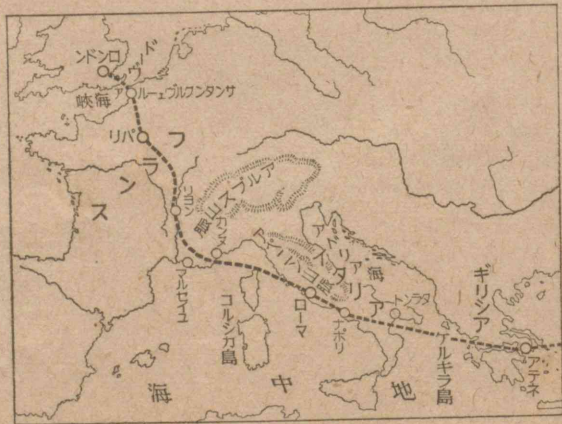
思あり。お目出たう。

と。もうパリも近い。

なだらかな丘を過ぎて飛ぶこと一時間、セーヌ河が見えて來た。道路に自動車の往來が激しく、鐵道が錯綜してゐる。彼方にエツフェル塔を見出す。兩人で顔を見合はせて萬歳を叫ぶ。終に花のパリに來たのだ。この時を我々はどんなに待ったことか。美しいパリの街々を上空から眺めるのは他日に譲り、ル、ブルジェの飛行場に向かふ。格納庫の前は一杯の人ばかり。屋根まで眞黒に人が集つ

セーヌ河
パリ附近を流れる大河
エツフェル塔
パリにある高さ
三百米の鐵塔
一九〇七年
二月十七日

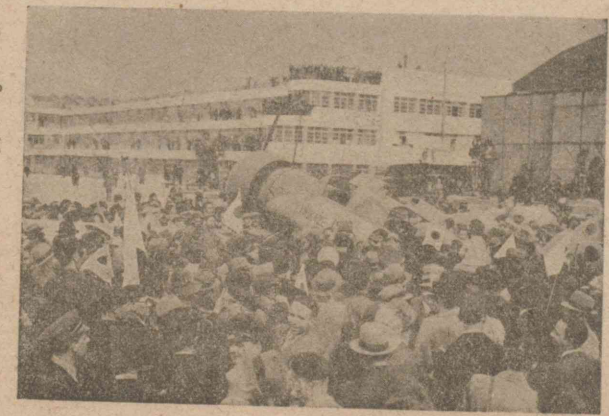
ル、ブルジェ
パリにある飛行
機發着場



アネトよロンドンで

バウンド
跳反

て我々の「神風」を迎へてくれる。慎重に三回も旋回して着陸したのに、大きなバウンドをしてしまった。大勢の人出に囲まれて驚いてしまった。我々のやつた飛行がこんなにも重大なものであらうかと考へ直してみる。大勢の人たちのお祝の握手やら挨拶やらを受けて、忽々に離陸する。報道寫眞師を乗せた飛行機が全速力で我を撮影しようとして追つかけて来る。我先を急ぐのではあるが、我等も遅い飛行機で速い飛行機を追つかけた經驗があるので、速力を緩めて待つてゐる。パリからサンタン



陸着リバ

サンタン
ヴェール
パリの東北
ドーヴァ海峡に
臨む

ドーヴァ海峡
イギリスとフラ
ンスとの間の海
峡

グルヴェールへ直行、ドーヴァ海峡を渡る。この海峡も「神風」を以てすれば十分とかゝらない。ドーヴァを右に見て英國に上陸。飛行場自動車路、ゴルフ場など總べてがロンドンの近きを思はしめる。黒い重々しいロンドンの街が視野に入つて來たと思ふと、クロイドン空港が目に入る。出迎への撮影飛行機が全速力で我々を追ふ。懐かしいブスモス機が二三機亂舞してゐる。パリの大歓迎にすっかり興奮した我々は、まさかロンドンでパリ以上の歓迎を受けようとは思はなかつた。

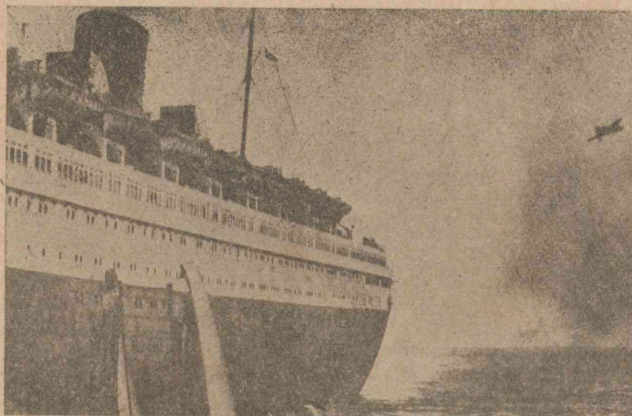


陸着ンドンロ

クロイドン
ロンドン郊外に
ある飛行機發着
場
ブスモス
輕快な小型飛行
機
朝日新聞社航空
部にもこの機が
あつて筆者は度
度探縦したこと
がある

着陸して見ると、神風を押しつぶすやうな群衆の殺到にまたも

面喰つてしまつた。お祝の花束が贈られ、寫眞班の包圍攻撃を受け、群衆の中を巡査に抱へられてゐる我を叩いたり、手を振つたり、何がなんだか判らない時間が續く。我々はたゞ飛行の機會を與へられた、神風に乗せて貰つただけなのに、どうしてこんなに英雄視されるのであらうか。着いてから三日目、まだ新聞記者、寫眞師の訪問が續き、街へ行き會ふ人が指さし、手を振つて我



御名代宮殿下を迎へる神風

出るとサイン攻めにあふ。

サイン署名

プリマス イギリスのイギリス海峡に面した港

御名代宮殿下 天皇皇后兩陛下の御名代として英國皇帝の戴冠式に臨ませたまふため御渡英中の秩父宮殿下並に同妃殿下

高濱虚子 名は清 俳人 帝國藝術院會員 明治七年(三三) 伊豫國(愛媛縣) 松山生 湖水 琵琶湖 部屋 比叡山延暦寺東塔の宿院の室

等を取圍む。ロンドンへ着きさへすればゆつくり落着けると思つたのに、何日になつたらゆつくり歩けるのだらうか。明日はまた人のゐない大空に「神風」と共にプリマスに御名代宮殿下をお迎へに行くのだ。空に上つてゐる時がやはり一番嬉しい。しかも明日は光榮のお出迎へ飛行である。明日の感激を思ひつゝ、幸運なりし飛行の記を終る。(東京朝日新聞)

四 比叡の鳥

高濱虚子

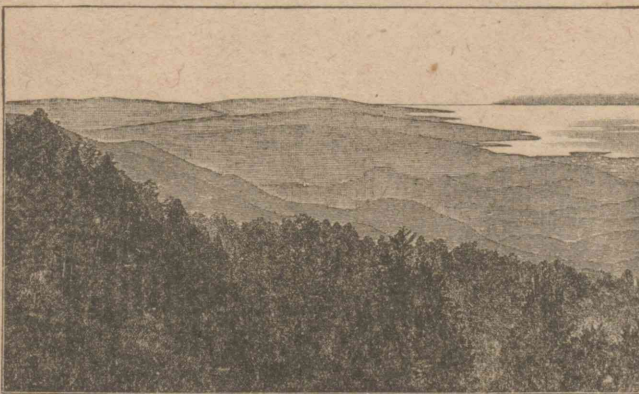
比叡を出て、楊枝を使ひながら湖水の見える部屋にいつて見る。朝日が一杯にはいつてゐる。湖水と思はれる邊は雲ばかりで何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見おろしたのと似た景色だ。部屋の下は東谷になつて

四 比叡の鳥

三

針
チ
チ
チ

みるので、我が眼よりやゝ高く、やゝ低く、數知れぬ杉の梢が、さながら針のやうに突つたつてゐる。左手には北谷の向かふに當る杜が、鋸の齒のやうな杉を背に並べて湖の方に流れてゐる。空氣がいやが上に清いので、近景の杉の梢も、遠景の杉の杜も、ともに新鮮な色をしてゐる。さうしてその間を薄い霞が流れてゐる。



杉の叢比

非常に靜かだ。自分の呼吸の外、うき世の物音は何も聞えぬ。唯この天地を我が物顔に啼轉つてゐるのは小鳥だ。何といふかはい

チ
チ
チ



雉子

い聲の小鳥があるものであらう。名の分らぬのが残念だ。その杉の梢で一羽が啼いてゐる。彼方の杉の梢で他の一羽が答へてゐる。又遙か向かふの谷深く他の一羽が應じてゐる。よく耳を澄ますと、なほ二三羽の聲が、どこかで聞えるやうだ。この小鳥の合奏を破るやうな別な聲の小鳥が突然その間に高音を張る。前の小鳥程優しい聲ではないが、又りゝしいところがあつて、その聲の空山に響く趣が何とも言へぬ。これも名は分らぬ。それが一羽ではない、三羽、四羽と段々聲の主が殖えて来る。前の小鳥が縦糸なら、この小鳥は横糸だ。互に錯綜して、よく諧調を保つところが面白い。突然けん／＼とけたゝましい音が谷を横ぎる。此方の谷にも響けば彼方の峯にも響く。昨日聞いた雉子の聲よりもやゝ急

山鳥



調だ。山鳥でもあらうか。前の二つの小鳥で織りなした美しい絹を唯一聲に引裂いたかと疑はれる。暫くして、その聲は谷の底の底、峯の奥の奥に浸込んでしまつて、あとはもとの静かさになる。

鰐口



啄木鳥



眞先にその静かさを破るものは鶯の聲だ。絹に置かれる緋のやうに美しい。一つの緋が置かれると、また縦糸を織つて前の小鳥が啼く。横糸を織つて次の小鳥が啼く。緋が啼く。縦糸が啼く。横糸が啼く。この絹をまた山鳥が破るのかと思ひながら待設けてゐると、不思議な聲が別に起る。それは麓の里の池で聞く蛙の聲によく似てゐて、谷の神社の鰐口が口をあけてつぶやくのかと思はれる。他の鳥の聲々が皆高調で晴々とした中に、獨り低調で不平らしい音を出すのが面白い。友は啄木

鳥だらうといつた。二人の小僧は山鳩だらうといつた。

湖水の上にはまだ漠々として白雲が漂つてゐる。杉の梢を渡る霧は少しづつ薄らいで、だん／＼と谷が深く見えて来る。

(新寫生文)

五 平安京

藤岡作太郎

日本は世界の樂土なり、東亞の伊太利なり、山川の風景往々として佳ならざるなきが中に、殊に衆美を鍾め群を抜いて立てるを京都とす。京都附近の景は日本のすべての景をエキスにしたるもの、規模の雄大豪壯なるものは存せずといへども、嘩麗幽婉の形態は備らざるなし。東に近く比叡、如意が嶽より三が峯まで、東山三十六峯笑ふが如く、北には鞍馬、貴船、水室、鷹が峯

藤岡作太郎

號は東圃

國文學者

文學博士

東京帝國大學文

科大學助教授

加賀國(石川縣)

金澤生

明治四十三年三

月〇卒

年四十一

エキス

主要成分をつめ

た固體又は液體

如意が嶽

比叡山の南にあ

る山

一名大文字山

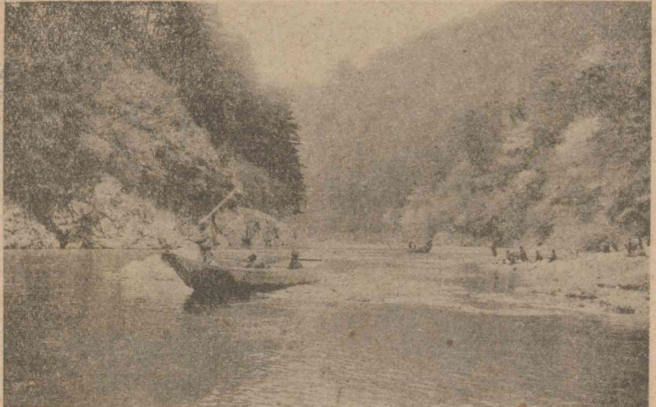
山崎 天王山
 四明が嶽 比叡山の頂
 神樂が岡 京都帝國大學の東の岡
 雙が岡 吉田山ともいふ
 男山 今の京都市右京區花園町にある
 山崎の對岸石清水八幡宮の鎮座する山

高尾の山々波濤の如く西にや、隔りて愛宕小倉龜山嵐山松尾より山崎に至りて地勢は窮る。松柏の綠色濃きなかに、或は目覺むるやうなる櫻の入り交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織込みたるあり。一面の草の頂たる四明が嶽、春なほ雪白き比良の遠山などは、わけて朝日夕日に照りはゆる色の千變萬化なるぞ面白き。東の神樂が岡、西の雙が岡は、大和の畝傍香具耳無の三山の如く近く相並びてあらねば、妻争ひの口碑も傳はらねど、子の日の遊に小松引く樂しみなど、いづれ劣らぬところから。南にや、隔りて男山これに對すれど、國家鎮護の八幡宮、宮柱太知りまして仰ぐも畏し。

京の東端に沿うて鴨河の流、紆の河合に高野の支流を集めて、南に珠を碎き去り、西に少し離れて桂川、大堰の激湍に清瀧を併せ

て琴の音涼しく又南に向かふ。二河南に合し、更に淀の急流に流れ込みて、沈々として西の方難波をさして走る。

茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與ふるものなしといへども、一面よりいへば山の内に籠りて海を見ざるは、又それだけの長所なくんばあらず。地勢の勾配稍急なれば、蘆間に出で入る白帆の町の側を往來する眺なきかはりに、濁りて底の明らかならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ性の鑛物を含める



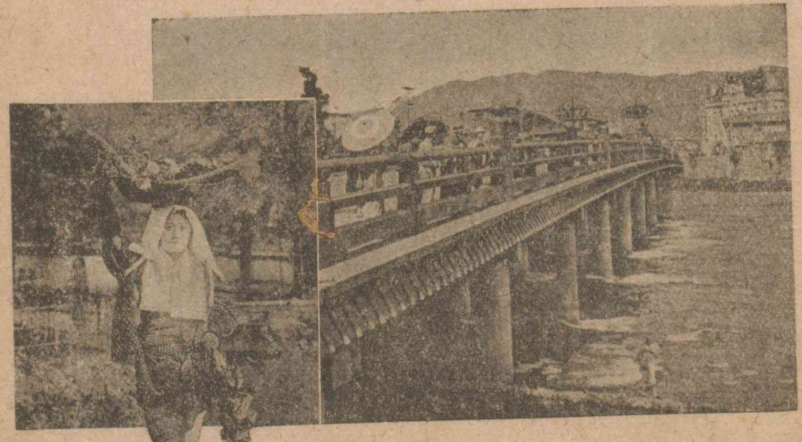
晒す布をも人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、
 棄てたる塵埃を更に岸に打上ぐるに、藻の臭添ひ、漁夫などの居
 る處は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと多し。京都
 に海なきは惜しむべしといへども、海なくして、清き京都は益、そ
 の清さを加ふるなり。

山紫水明の語はよく京都の景色を言ひあらはせり。何處の山
 水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむる所
 なるを知らば、三面を山にして土地濕潤、水分を含むこと殊に濃
 かなる京都の朝な夕ながいかに變化に富めるかは、説明を須ひ
 ずとも明らかなるべし。

嘗て一夏を北陸の海岸に送れることありき。一日驟雨の至る
 を見る。疾風さと吹き、浪俄に高く、黒雲奔りて魔の如く、見るが

吉田
 大學・高等學校
 等がある
 作者は嘗て第三
 高等學校教授で
 あつた

うちに重なり重なりて海を
 覆ふ。波の音は雲の中にあ
 り、電光閃々、磨る墨の雲間に
 火花を散らす。波か、雷か。
 世界はたゞ一暗黒の中に没
 し去るかと思はれて、妻じか
 りき。かくの如く壯絶なる
 景は、わが數年の滯留の中遂
 に京都にては見ることを得
 ず。されど下京より吉田に
 通ひたる朝な夕の景色は
 今に恍惚として眼前にある



女原大 京都三条上り東山を望む

寝たる東山
蒲團着て寝たる
姿や東山(風雪)

山科
京都市東山區山
科町
東山の東方

北原白秋
名は隆吉
歌人・詩人
帝國藝術院會員
明治十八年(三四)
西福岡縣生

を覺ゆ。引渡す霞に、三條の大橋の擬寶珠の一つく、彼方へ彼方へと淡くなりて、向かふに寝たる東山は有るか無きかの夢より未だ覺めやらす。吉田の岡に並び立てる松は墨繪の刷毛の濃く淡く、花賣る少女の姿は隠れて、聲ぞまづ朝靄を漏れ來る。時雨の景色の又よその國には見られぬ様よ。愛宕の峯を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちにはらくと面を撲つ。あはやと驚きも果てず、雲は走りて直ちに東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡するなるべし。かゝる優しき景色は、山河襟帶の平安京の特色なり。(國文學全史)

六 新月
斷崖の松の木に

北原白秋

月ほそくかゝりたり。
ほそき月、

金無垢の月。

入海の波間にも

また月はしづきゆく。

沈々と

金の鉤

金無垢のするどさよ、

絹渡の雨ののち、

しんじつに

崖の松の木に月か白くかこむて其の光を
月を其の松の影に

入海の波間にも
金の鉤の影に

また月はしづきゆく
しんじつに

金無垢のするどさよ
絹渡の雨ののち

走りいづるその蒼さ。

島黒く、海黒き

眞の闇

舟一つすゝみゆく、

その上にほそき月。

なにかわかぬ、

魚族は目をさまし、

鈴蟲は一心に鳴きしきる、

虔のきはまり。

島は黒く、海は黒く、
舟は一つすゝみゆく、
その上にほそき月、
なにかわかぬ、
魚族は目をさまし、
鈴蟲は一心に鳴きしきる、
虔のきはまり。

なにかわかぬ、
魚族は目をさまし、
鈴蟲は一心に鳴きしきる、
虔のきはまり。

闇の夜は断崖も、松の木も

かげわかず、ゆく舟も見えわかず。

たゞ光るほそき月、

金無垢のほそき月。(畑の祭)

闇の夜は断崖も、松の木も
かげわかず、ゆく舟も見えわかず。
たゞ光るほそき月、
金無垢のほそき月。(畑の祭)

七 敵艦見ゆ

水野 廣 徳

我が聯合艦隊が鎮海灣に集りてより、はや二月あまりの浪枕、浮

世の春を他所に見て、焰硝の臭、銃砲の響骨の碎くる訓練に、心膽

愈、練れて腕益、牙え、士氣は昂つて敵を呑む一萬八千の海上男兒

敵艦來れ、と待構へて居る。明くれば五月二十七日、前日の訓練

に疲れ切つたる將卒の、曉の夢尙濃かなる午前五時、思ひ出すさ

へ肉躍る、各艦の無線電信機に感ぜし一信

水野廣徳

海軍大佐

明治十年(三五七)

愛媛縣生

鎮海灣

朝鮮慶尙南道に

ある要港

釜山の西六十軒

馬山の南八軒

五月二十七日

明治三十八年

第二艦隊

露國第二艦隊

明治三十八年三

月十六日マダガ

スカルを發し五

月五日第三艦隊

と安南に會合し

た

司令長官はロジ

エストウエンス

キー中將

東郷海軍大將

東郷平八郎

元帥

大勳位

侯爵

薩摩國(鹿兒島

縣)生

昭和九年薨

年八十八

軍艦十八隻

第一戰隊

三笠・敷島・富

士・朝日・春日・

日進・龍田

第二戰隊

出雲・吾妻・淺

間・八雲・常磐

磐手・千早

第四戰隊

浪速・高千穂・

對馬・明石

敵第二艦隊見ゆ。

聯合艦隊司令長官東郷海軍大將は、直ちに全艦隊に對して、急速出港の命を傳ふると同時に、大本營に宛て、

敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直ちに出勤、これを撃滅せんとす。本日天氣晴朗なれども波高し。

との電報を發した。何ぞ其の語の詩的にして、其の意氣の豪壯なる。かくて我が主力艦隊の各艦艇は、逐次錨を抜いて豫定の航行序列を作り、午前七時には艦隊全部、根據地を出發した。東郷聯合艦隊司令長官は其の將旗を高く三笠の大橋頭に翻し、軍艦十八隻、驅逐艦、水雷艇合して二十八隻、陣の延長五海里、雄姿堂堂たるものであつた。

我が艦隊は行く／＼、戰鬪準備を整へつゝ、洪波を蹴つて、沖の島

に向かひ急進した。砲臺には彈藥を備へ、艦橋其の他の要所には釣床を縛つて防彈障を造り、重要品は水線下若しくは裝甲板に納め、甲板各所には防火、防水の要具を備へ、隔壁戸を締め、通信装置を驗し、其の他一切の戰備を盡くし、最後に甲板を清めて滑りを防ぐ砂を撒いた。午前十時三十分東郷長官は各艦に對して晝食の命を下した。士官室は既に戰時治療所と變じ、食卓もなければ椅子もなく、一同甲板に蹲つて、心ばかりの晝食を認めた。晩食の時再び此處に集る者が、果して幾人あるだらう。これぞ最後の會食と思へば、張詰めた心にも、坐ろに感慨に堪へぬものがある。敵情に關する電信は愈々頻繁となり、彼我艦隊は刻刻相接近しつゝある。我が主力艦隊は正午、沖の島の北方約十五海里の地點に達した。而も未だ敵影を認めない。東郷長官

生に
自然に
やかま
頻繁
刻刻

第三戰隊 笠置・千歳・新高・音羽
 第五戰隊 嚴島・鎮遠・松島・橋立・八重山
 第六戰隊 須磨・和泉・千代田・秋津洲

は止つて敵の來るを待たんよりは、寧ろ進んで之を迎ふるに如かずとなし、針路を右に折つて西方に向かつた。山のごとき逆浪は艦首に激して甲板を洗ひ、飛沫は颯と水面上三十尺の艦橋に達する。已にして午後一時三十分頃に至るや、朝來敵と接觸を保ちつゝ、來りし我が第三戰隊を南西方に、第五第六戰隊を西方に發見し、茲に我が全艦隊の連絡は完全に成立した。やがて同四十分頃我が主力艦隊は左舷南方數海里に當り、濛氣を破つて堂々進み來る敵の全艦隊を發見した。大小合して三十餘隻の艦艦は、大戦闘旗を橋頭に翻し、遂に其の後尾を濛氣のうちに隠しつゝ、北々東の針路を取つて眞一文字に航進して來る。雲を抜け出づる黒龍か、波を蹴破る長鯨か。壯大雄偉、實に目も覺むるばかりである。參謀長以下幕僚を率ゐ、三笠の前艦橋に立

縁艦 舟に便の舟
 睥睨 睥睨
 颯と 颯と
 濛氣 濛氣
 隠しつゝ 隠しつゝ

つて、敵艦隊を睥睨せる東郷大將は、各艦に戦闘用意を命ずると共に、先づ敵勢力の薄弱なる左翼部隊を撃破せんと決心し、戦闘速力を以て、斜に敵針路の前方を横斷した。偶、旗艦三笠の橋頭、颯と翻つた一連の信號旗、

皇國の興廢此の一戦に在り、各員一層奮勵努力せよ。

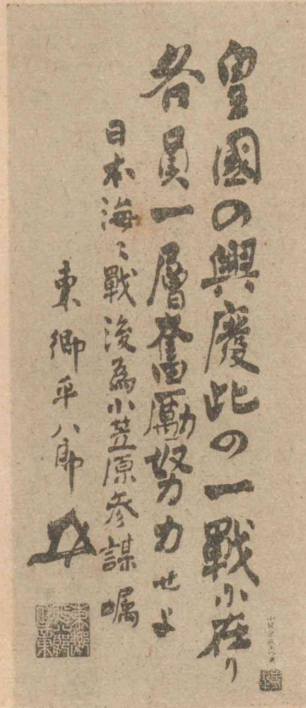
全艦隊一萬八千の將卒は覺えず奮躍した。

指願

敵の艦隊既に指願の中にあり。艦内如何にと見渡せば、艦長は艦橋に在つて戦備一切を督し、航海長は羅針盤を擁して艦の操縦に任じ、砲術長は距離を測つて砲火の指揮を統べ、水雷長は方位盤を整へて發射の機を窺ひ、分隊長は受持砲臺を指揮し、各從屬將校は夫々分擔の配置を守り、萬に一失なきを期して居る。砲員は砲に、水雷部員は發射管に就き、運彈員は彈藥を運び、防火

隊は蛇管ヘビパイプを繰り、信號部員は揚旗索シグナルハリヤドを握り、戦闘の開始を今や遅しと待つて居る。中下甲板に降りて見れば、防水戸は密閉せられ、鐵窓扉は鎖され、何れの區劃も人影寂として電燈獨り輝き、唯

筆蹟
興國の興廢此の
一戦に在り各員
一層努力せよ
日本海々戦後
爲小笠原參謀
囑、東郷平八郎



東郷元帥筆
置せられたる
傳令兵の耳を
澄まして佇め
るのみ。副長

と甲板掛士官とは、艦の前後に奔走して、火災浸水の非常を警めて居る。前後二箇所の戦時治療所には、石炭酸の臭紛として鼻を衝き、看護は繃帶を整へ、軍醫は刀を執り、一脚の手術臺は早く愛國の血潮を舐めんと待つて居る。更に降りて彈藥通路に到

大曲脈
かたつと
まをすもの

れば、こゝは水線下十數尺なる溫度百二十度の焦熱地獄、流る汗を拭ふに暇なく、力に餘る大小彈藥を各砲臺に供給する。轉じて機關室を覗き見れば、油の焦げる異臭先づ鼻を衝き、此方の機關室には、幾百貫の大曲脈クラックが軋々聲を發し、全速力を以て回轉せる有様、實に耳聾ロウし眼も眩ウツむばかりに物凄く、彼方の汽罐室には猛火炎々として絶えず投込む石炭は一瞬にして白熱の團塊と化す。朦朧モウロウたる中に、水を注ぐもの、油を差すもの、石炭をくぶ

るもの、此處には戦闘既に開始せられて居る。午後二時二分、我が艦隊は敵を左舷南方約一萬米に見るに及んで、針路を南西に變じ、敵と反航の姿勢を執つた。我が速力十五海里、敵の速力約十海里、彼我艦隊は今や一分間約八百米の割合を以て相近づきつゝある。此の儘直進して敵と反航戦を交へ

伊地知海軍大佐
 伊地知彦次郎
 後に海軍中將
 加藤海軍少將
 加藤友三郎
 後に元帥・海軍
 大将・海軍大臣
 内閣總理大臣
 大勳位・子爵
 大正十五年卒
 年六十二
 秋山海軍中佐
 秋山眞之
 後に海軍中將
 大正七年卒
 年五十一
 布目海軍中佐
 布目滿造
 後に海軍少將
 安保海軍少佐
 安保清種
 後に海軍大将
 男爵
 内閣參議

んか、はた針路を反轉して敵の先頭を壓せんか、正奇の戦法未だ孰れに決するかを知らぬ。こゝ三笠の艦橋上を眺むれば、赭顔長身、剃るに暇なき髯に飛沫の露を拭ひもやらず、屹然羅針盤を擁して立てるものは、旗艦長として令名噴々たる艦長伊地知海軍大佐である。雙眼鏡片手に敵の行動を注視せるものは、冷靜沈毅、頭髮焦ぐるも猶熱せざる參謀長加藤海軍少將である。炯眼隆鼻ノートを手にして、悠々敵狀を寫せるものは、神謀鬼策機に應じて斷ずる先任參謀秋山海軍中佐である。其の他航海長布目海軍中佐は海圖を按じて彼我の位置を測り、砲術長安保海軍少佐は秒時計を握つて彈道の時間を計らんと構へ、各少尉候補生は或は測程儀を窺ひて距離を測り、或は傳話管に就いて命令を各部に傳へて居る。而して豐頬短軀、左手堅く長劍の欄



(筆郎太鉦城東) 艦 笠 三 の 前 始 開 開 戦

を握り、右手軽く雙眼鏡を携へ、半白の粗髯を海風になぶらせつゝ、泰然として敵を眺むるものは、これぞ我が聯合艦隊司令長官東郷海軍大将である。戦機は愈々熟して距離測程士の報ずる聲は、九千米、八千五百米。既に十二吋砲の有効距離に達した。砲は彈丸を孕んで、射手の指は引金に懸つて居る。萬

山雨來らん
溪雲初起日沈沈
開山雨欲來風滿樓
滿樓
(唐の許渾)

小笠原長生

海軍中將

宮中顧問官

子爵

慶應三年(一八五七)

舊唐津藩主の家

に生まれた

決死の一隊

昭和七年二月二

十二日上海事變

に於て廟江鎮鐵

條網爆破の決死

隊に加入した三

十六勇士

廟江鎮附近



弩齊しく發せんとして未だ發せず、満を持して動かざること山の如し。正に是、山雨來らんと欲して風樓に満つ。の時である。
(此一戰)

八三つの肉弾

小笠原長生

敵前二十米まで進出した決死の一隊は、敵の猛射を浴びてその前進をはゞまれると共に、時は一秒々々と迫つた。遂に「強行破壊」の命は下り、馬田軍曹の率ゐる第一班は突撃して鐵條網の破壊を敢行することになつたが、無念や、全員殆ど斃れて、その目的を達することは容易ではない。親愛なる戦友は、敵弾のために相次いで或は戦死を遂げ、或は傷つき倒れた。豫備にあつた第二班の勇士たちは、燃えあがる悲

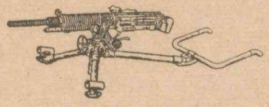
馬田軍曹

第二破壊隊第一

班長工兵軍曹馬

田豊喜

機關銃



三勇士

第二破壊隊第二

班第一組工兵一

等兵作江伊之助

同北川丞

同江下武二

憤の念に、思はず毗を裂いて敵陣を睨んだ。勝誇つた敵軍は、なほも猛烈に機關銃や小銃を亂射して、その危険と凄慘とはいやましに加るばかりであつた。今や鐵條網破壊の必要は焦眉の急に迫つてゐるが、一旦壕を出たが最後、忽ちやられてしまふ、鐵條網に到達することなどは到底出來さうにない。しかも歩兵部隊の突撃開始の時期は、刻々に切迫して來る。今にも下るべき突撃破壊の命を前に、三勇士たちは、いかにして、この猛射の中を衝いて破壊作業を達成すべきかと考へた。死は易い、されど任を果すのは難い。犬死しては不忠になる！「今に見ろ、今度こそは完全に破壊して見せるぞ。」三勇士は、心のうちでかう叫んだ。

下元治成
旅團

けれども、この場合、目的の達成は殆ど不可能と思はれるほど、險悪極まる情況であつた。

「おい、敵の射撃がかう猛烈では、とても鐵條網へは行きつけないぞ。」

「たとへ行きつけたとしても、破壊筒への點火はむづかしいぞ。あ、さうだ、火をつけてから、その破壊筒を持つて突撃しよう。そして投げこまう。」

三勇士の間には、期せずして、忽ちこの悲壯極まる決心がついた。この方法こそ、工兵としては最後の非常手段で、身を捨ててその目的を貫徹する唯一の破壊方法であつた。しかし、三勇士の心の中には、それだけで果して十分に破壊の目的が達せられるかどうか、大きな不安があつた。

「投げこんだだけでは安心が出来ないぞ。」

「よしつ、それなら、ひつ抱へたま、鐵條網の中へ飛びこまう。」

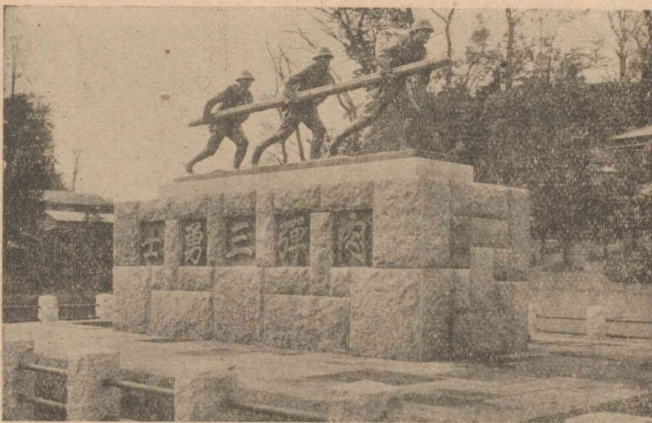
「さうだ、破壊筒といつしよに、おれたちも爆裂してしまふのだ。」
「よし、それならきつとうまくいくぞ。」

三勇士は、じつと手を握り合つて、決死の約束を取りかはした。實際この場合、爆弾と共に三人が飛込まねば、歩兵突撃路は絶対に開かれないのだ。何といふ健氣な覺悟であらう。自分の肉體を爆裂させて鐵條網を破壊しようといふのだ。わが身を肉弾にして成功してみせるといふ悲壯極まる決心なのだ。鬼神もその壯烈に泣かう！

時は來た、重大任務の時は來た。

東島隊長
第二破壊隊長工
兵少尉東島時松

「最後の組だつ」



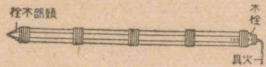
肉 弾 三 勇 士
(内 寺 松 青 區 芝 市 京 東)

東島隊長の悲痛な叫び。
「それつ」
待ちに待つた三勇士は、欣然としてすぐに突撃破壊の準備にかつた。
生死を超越した三勇士は、鬼神の如きはやわざで、四米の青竹で作つた破壊筒に、次の令を待つまでもなく、すばやく、點火した。

「前へつ」

の號令一下、直に飛出した、北川江下作江の順序で、點火された破

破壊筒



壊筒を引擔ぎ、堰を破る奔流の如く、はた弦を離れた矢の如く、無二無三に飛出した。

身も心も一つになつた三つの肉弾は、何の躊躇もあらばこそ、北川一等兵を先頭に、一つの破壊筒となつて、戦友の死骸を飛越え、踏越え、雨霞と降りそぐ敵の銃砲弾の中を、鐵條網目がけて突進した。

が、惜しむべし、北川一等兵は小銃弾にやられて、はつたり倒れ、二勇士も同時につまづいた。「しまつた」と思つた刹那、三勇士はまた起上り、今しも爆裂しようとする破壊筒をひつか、へてまっしぐらに突進した。

「あつ」

と思はず叫ぶ途端、

の時、だしぬけに……ずどーん！物凄い爆聲と共に、中庭あたりで爆發した。窓硝子がびり／＼と震へる。建物がぶる／＼と身慄ひする。何處かで硝子の破れて落ちる音。私はその刹那、全校生徒が悲鳴をあげて、總立ちになつて我先に逃出すことを直覺的に豫期して教室を見渡した。

叫ばない。泣かない。立たない。皆頭左！と號令でもかゝつたやうに、席についたまま、先天的に中庭の方を見やつた。起つて讀本を讀んでゐた生徒も、ちよつとやめて、その方を見ただけ。平氣ですぐに後を讀續けた。聲も慄へてゐない。一同がまた讀本に見入る。

私は夢見る心地がした。

今一つトレビーズについて私の記憶に刻まれてゐるのは、一千九百十八年九月、その町で軍功勳章たる黄金章を授けられた憲兵ベヅーチの事だ。

これより先、同年六月、敵の幾臺かの飛行機がまたしてもこの町を襲撃した。敵の投下した巨大な爆彈私は戰場で屢、長さ五尺位もある爆彈が、大地に喰込んで不發のまま、つき立つてゐるのを見た。が、町の西方にある伊軍の火藥庫に飛込んだ。導火線が青白い煙を立てて燃えてゐる。それが燃終つたら、この火藥庫の全部が爆發するのだ。

火藥庫の見張をしてゐた憲兵ベヅーチは反射的に爆彈に飛びついた。そしてぶす／＼と燃える導火線を右の手に巻きつけ、ともぎ取らうとした。取れぬ。線が燃える。掌から手の甲に

かけてぢり／＼と燃えて行く、妙なにほひを立てて。
 燃縮まつた短い導火線が、焼けたゞれた手からするりと抜けた。
 もう線は寸を残さぬ。この少壯な憲兵は飛鳥の如く身を爆弾
 に投げかけて、その僅かに残つた導火線をしつかと口に咬へ、全
 身の力をこめて、遂にまだ燃えてゐる線を喰ひちぎつた。
 かくして全火薬庫が救はれ、幾多の人命が事なきを得た。
 トレビゾの勳章授與式の當日、私は彼少壯憲兵がまだ繃帯を
 してゐた右手で舉手の禮をなしつゝ、官民の拍手に答へ、さなが
 ら處女をとめの如く恥ぢらへる風姿を見て、思はず涙したが、今頃はど
 こにどうしてゐるであらう。
 私はいつかかの沈着豪膽にして且謙讓けんじやう柔和なる若き勇士を、そ
 の住居に訪れたいと思つてゐる。(大戦中のイタリー)

一〇 童謡四首

ひかうき

ひかうき、ひかうき、
うなつてる。

どこどこ、

あんなにうなつてる。

大やね、小やね、

やねつゞき、

どちらを見ても

やねばかり。

葛原 齒シヅメ

葛原齒
 童謡童話作家
 教育家
 明治十八年(三四)
 毛廣島縣生

深草
 分村

さも不思議そに
親が「もう」と啼きや子も「もう」と啼く。

橋は一本橋

水車は早い、

くるりくくと朝晩まはる

くるり廻れば

親牛子牛、

小首かして啼きく通る。

(コドモアサヒ)

河井醉茗

名は又平

詩人

帝國藝術院會員

明治七年(一五四)

堺市生

河井醉茗

いなご

いなご みつけた

生どつた。

みつけたと思つたら、

びよんと飛ぶ。

いなご とまつた、

稲の葉に。

とまつたと思つたら、

びよんと飛ぶ。

いなご かくれた、

いなご 飛ぶ

いなご 飛ぶ

草の葉に。

かくれたと思つたら、

びよんと飛ぶ。

いなご おさへた、

つかまへた。

おさへたと思つたら、

びよんと飛ぶ。(ゴドモノクニ)

猿の猿真似

山で お猿が 木登りしてる、

山で 子猿も 木登りしてる。

野口雨情

野口雨情
名は英吉
童謡民謡作家
明治十五年(西
三)茨城縣生
成家町

童謡教育

創始者

赤月夜

砂七郎

十五夜お月又

童謡十篇

田園趣味

とらちと来

外れて世に

情緒的お

所大特徴あり

花
作者

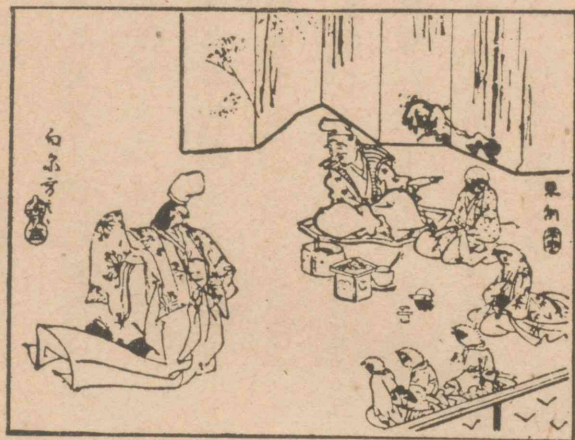
猿の猿真似、
子猿の小真似。

お猿 木登り 上手に出来る、
子猿 木登り 上手に出来る。

木から お猿が おりて水のんだ。
木から 子猿も おりて水のんだ。

お猿 水の上で また 木に登る、
子猿 水の上で また 木に登る。

婆「につくい雀だ。忙しいのに折角煮た糊をみんな舐めた。腹
が立ち申す。」
雀「ちうくくく。」



(里れくか) 家の雀

娘「かゝ様むごい事なされます
な。」
彌五太夫雀を不憫におもひ、お
梅が手を引き、たづねに出にけ
り。親雀、彌五太夫が心を感じ、
菅の松原まで迎ひに出で、禮を
申してともなひ行き、大分馳走
する。

一代女
西鶴草子
一代女六巻

北公 好色庵
老尼 二人の
お客に對し
假々の若さ
頃の生活も
新す
二代女

瀬川
初代徳川菊之丞
元文二年(三三七)
江戸の中村座で
一代女の槍踊を
演じた

彌「舌切雀、ちよつくく」
娘「舌切雀、ちよつくく」

下人新八「旦那、向かひが雀殿の家かな。さてく結構な門構かな。
お梅様、雀殿に逢ひますぞ。大分くたびれた。」

新「白壁造りの雀殿の所は此處かな。」
雀家來「彌五太夫様、ようこそ御出でなされました。この方の娘子
もいかい喜でござります。」

彌「きさまは家來衆か。」
娘「早く雀殿に逢ひたらござる。」

彌五太夫へ馳走に、雀ども瀬川を踊り、一代女の所作事、大でけ大

でけ。

雀「御爺様、御馳走に踊を申しつけました。お梅様、よう御覽遊ば

しませ。」

彌「こなたの舌はなほりましたか。

これは菊之丞がした槍踊ぢや

の。」

娘面白がる。

踊 娘「新八、おもしろいの。ちと褒め

やれ。」

新「なか／＼面白うござる。」



雀の家來ども、少しのうちも彌五太夫に馴染みて、残り多がり、皆

皆暇乞する。

彌五太夫、假初に雀の許へ尋ね來りて、ゆる／＼馳走に逢ひ、土産に葛籠を貰ひて歸る。

婆様へも土産にせんとて、重き葛籠を新八に背負はせてかへし、

雀名残のところ。

雀「御爺様、御名残惜しや。」

彌「さて／＼、ちよつと來て久々逗留して、いかい造作になりました

た。縁もあらば、そのうち逢ひませう。さらば／＼。」

新「旦那、私が背負つた葛籠は大分重うございます。」

彌「この葛籠は大分軽いぞ／＼。雀殿、さらば／＼。」

娘「おさらばよ。かゝ様が待つてござらう。はやくきゐりました

よ。」

鳥居勝商

三河の人
徳川家康の臣奥平信昌に仕へた
天正三年(三三五)節に死す
年三十六

湯淺常山

名は元禎
漢學者
岡山の藩士
天明元年(三四四)歿
年七十四

勝頼

武田勝頼
奥平九八郎

初め今川氏に屬したが天正元年(三三三)父貞能と共に家康に歸して長篠城を賜はつた

爺家へ歸り、雀に貰ひし輕き葛籠をあけしに、これは金銀澤山に、色々結構なる物ばかり出で、一生榮華に暮しけり。
慳貪婆胴慾なれば、重き葛籠の蓋あけければ、色々な化物出で、婆に喰ひつく。
化「も、んぐわ、く」
婆「のう怖や」。(赤本 したきれ雀)

一二 鳥居勝商

湯淺常山

天正三年、勝頼、奥平九八郎、信昌が三州長篠の城を圍み攻む。東照宮援兵を織田家に乞はせ給ひ、後卷の謀をめぐらし給ふ處に、城中糧米既に盡きんとせしかば、此の旨を告げ奉らんため、鳥居

長篠

愛知縣三河國南設樂郡長篠村
豊橋市の北二十八軒餘
豊川の上流にある

東照宮

徳川家康の卒後に賜はつた諡

織田家

織田信長

雁峯が嶺

長篠城の西四軒

廣瀬

長篠城の南二軒

鳥居のあ
る

強右衛門勝商に命じて、密かに城を出す。鳥居、逃れ出づる事を得ば、向かふの雁峯が嶺に煙をあぐべし。三日を過ぎて、又かの山に煙を二度あげなば、後卷なしと知り給ふべし。三度あげなば、後卷あることを知り給へ」と約しければ、信昌鈴木金七郎を鳥居にそへて遣はす。
五月十四日の夜、城の西なる山の岩根をつたひて川に入る。寄手素より大野川瀧川の水底に繩を張りて、鳴子を懸けたれば、通るべきやうもなし。二人は水練の達者にて、川の淺瀬はよく知りつ。小脇差を抜きて、川底を潜り、繩を切つて通りしかば、からからと鳴りけるを、番の兵ども怪しみけるに、其の中に一人、五月雨には、かゝる川をば、鱸の通るならん」と言ひければ、ぎて止みぬ。二人は早瀧の下廣瀬といふ處に上り、雁峯が嶺にて煙をあげ、十

家後令
日修
子界

豐臣太閤

小學國語讀本卷七、十六、木下藤吉郎參照

三上參次

史學者

文學博士

東京帝國大學名譽教授

帝國學士院會員

昭和十四年歿

眞書太閤記

三百六十卷

作者未詳

繪本太閤記

八十四卷

作者未詳

三國志

通俗三國志の略

七十五卷

三國志演義を湖南文山が和譯したもの

漢楚軍談

通俗漢楚軍談の略

十五卷

項羽・劉邦の興亡を物語った書

夢梅軒章峯著

太田和泉守牛一

尾張の人

信長及び秀吉に仕へた

大村法橋由己

播磨の人

柴田勝家及び秀吉に仕へた

楠長詣正虎

足利義輝及び信長・秀吉に仕へた

大政所

攝政關白の母

秀吉の大政所は尾張國御器所村(今の名古屋市)の人

同國中村の人木下彌右衛門に嫁して秀吉を生む

一三 豐臣太閤

三 上 參 次

從來豐太閤の人物事業を世間に紹介したりしは、眞書太閤記繪本太閤記等の書にして、三國志漢楚軍談などと共に普く上下貴賤の間に愛讀せられしのみならず、また講談師の種本ともなりて、文字なき社會にもよく知られたり。然るに、惜しいかな、此等の書には、武邊の偉人としての太閤は稍、描き出されたれども、其の他の側面は、殆ど全く忘却せられたるが如く、間、又いみじき誤謬をさへ流布したり。太閤が無學文盲なる人と傳へられたるが如き、其の最も著しき例證なるべし。磨けば、益、光り、鑽れば、彌、堅し。眞に偉大なる人物は子細に研究するに隨ひて、一層其の光彩を放つものなり。予は今太閤が一

面にては雄才大略の人なりしと同時に、一面には決して無學文盲にあらざりしを斷言し得るを喜ぶ。抑、太閤は一代の事蹟頗る多く、事業の規模甚だ大なり。故に、舊大名たりし華族の諸家、古社寺舊家等に太閤の文書の傳へらるゝもの、其の幾千なるを知らず。公の祐筆たりし太田和泉守牛一、大村法橋由己、楠長詣正虎等の文章家の手に成りたりと思しき、雄健にして生氣に富める文書、其の大部分を占めたりとはいへ、確に太閤の自筆なる色紙、短冊、消息の類も亦少しとせず。西に東に遠征せる先より母なる大政所、夫人なる淺野氏、若しくは、一子秀頼等に贈りたる書狀の如きは、親子夫婦の間柄の事なれば、もとより祐筆に託すべくもあらず、皆自ら筆を執りたりしなり。書狀に用ひたる文字は大抵平假名なり。書體及び筆力に清婉。

文祿二年(三五〇) 歿
淺野氏
尾張中村の人
杉原某の二女
淺野長勝の養女
北政所

江村專齋
桃山時代より江
戸初期の儒醫
寛文四年(三三四)
歿
年一百



(藏院慶成山野高國伊紀) 吉 秀 臣 豊

秀潤等の讚美の辭を加ふることこそ敢へてする能はざれ、頗る
圓熟したるものにして、その中、自ら峻拔の氣象のあらはるゝを
見る。漢字も亦用ひられたる
が、其の崩し方も無下に卑しか
らず。嘗て習字せしことの無
き人には決して能くし得ると
ころに非ざるなり。江村專齋
の老人雑話に、太閤の祐筆が醜
翻の醜の字を忘れて、とみには
思ひ出でざりしを、大の字を書
けよ、といひし談を記せるは、太
閤の簡易を喜び、敏捷を尙びしをいへるにて、少しも漢字を知ら

ざりしをいへるにはあらず
軍陣にての消息などは、咄嗟に文章を成したるにて、字句の洗鍊
なしと雖も、天真爛漫、辭簡にして意達し、少しも凝滞する所なし。
而して、其の間に溢るゝばかりの愛情現れて、趣味の津々たるも
のあるを覺ゆ。天正十八年小田原在陣の中に、母に寄せたる書
の中に、*あつた様はどやうかへ見物にも、かまふそ、かまふそ*
り候うて給はるべく候。たのみ申し候。の語あり。千言萬語を
費すとも、子の親に對する愛情は此の「若くなり給はれ」の一語よ
り適切なるものはあらず。又その政所淺野氏への書の中には
「ねんごろに文給はり御げんさんの心してねんごろにみまゐら
せ候。ことし内にはひまあけ參るべく候。心やすく候べく候。
あつた様はどやうかへ見物にも、かまふそ、かまふそ
かならずとし内に參り候うて御目にかゝり、つもる御物がたり

あつた様はどやうかへ見物にも、かまふそ、かまふそ
ねんごろに文給はり御げんさんの心してねんごろにみまゐらせ候。ことし内にはひまあけ參るべく候。心やすく候べく候。かならずとし内に參り候うて御目にかゝり、つもる御物がたり

筆蹟

一かたんと思へは
かつまげんと思
へはまくる心次
第のもときか
せよ
月みればもろこ
し人の心さへそ
らにしらるゝ
秋の秋かせか
空かな 夕ぐれか
八月十一日
豊臣秀吉

撥亂反正

撥亂反正
正(公羊傳)
撥は治也

一かたんと思へは

かつまげんと思

へはまくる心次

第のもときか

せよ

月みればもろこ

し人の心さへそ

らにしらるゝ

秋の秋かせか

(藏寺臺高都京)

申すべく候等の句あるなり。
祐筆の手に成りたる文書の
中にも、彼處此處に太閤の口
臣授によれりと思はるゝ所あ
秀り。固より千軍萬馬の血腥
吉き中に成長したる人の習な
筆れば、太閤も多少殺伐粗暴の
氣風ありしを免れず。然り、
撥亂反正の功を奏するには、
多少かゝる氣風の必要もあ
りしなるべし。しかも、古文
書の上より觀察するときは、

天正十四年
正親町天皇の御
代(三三六)

龍安寺
京都市右京區花
園町に在る
細川政元創立
有名な石庭のあ
る寺

太閤は亦母に孝にして、妻子に愛あり、將卒に對しては最も慈悲
の念に富みたる善良なる紳士なりしを見る。
さて、太閤の歌は如何に。天正十四年春二月二十四日、太閤禁中
に伺候しけるに、九重の櫻花今を盛と咲亂れたるを愛でて、其の
下に徘徊せり。正親町帝之を聞し召し、やがて、畏くも勅使を遣
はし、花の折枝に一首の御製を添へて下し賜ひしかば、太閤感謝
に堪へず、即ち

忍びつゝ霞とともにながめしもあらはれけりな花の木
のもと

と返歌を上られき。又、天正十六年の事なりけり、北山に狩して
龍安寺に憩へる事ありき。頃しも春の最中なりけるに、庭前の
枝垂櫻未だ綻びず、却つて淡雪のちらく、と降來りしかば、太閤

雪の煙

おもしろく思ひて、

時ならぬさくらの枝にふる雪は花をおそしとさそひ來

ぬらん 春の最中櫻の枝に時ふと降り雪は定めて

と詠まれき。逸興想ふべし。文祿三年諸大名を率ゐて吉野の

花見を催されし時、關屋の花の下にては、

吉野山たれとむるとはなけれども今宵も花のかけにや

どらん たれも我をささぐらふれば此の吉野山

と吟じ、藏王堂にては、をかりよう

歸らじとおもふ家路を入相のかねこそ花のうらみなり

けれ せむらひあて、こゝかたはわかつことばやあど思つて居るのたふ

と歌はれたり。巧を弄ばずして、なかくに雅趣に富み、格調も亦平凡ならずして、古の撰集の中にも置きたき心地せらる。

文祿三年 後陽成天皇の御代(三五四)
關屋の花 奈良縣吉野町の總門から下の吉野の櫻
藏王堂 吉野町にある藏王權現を祀る

紀州征伐 天正十三年(三四) 五根來寺を討つ 玉津島 和歌山市の南郊 和歌浦町にある 玉津島神社 小田原陣 天正十七年(三四) 北條氏を討つ 清見潟 今の東海道線興津驛附近の海灣 名護屋 佐賀縣肥前國東松浦郡呼子村の西の村 太閤征韓の本營 聚樂第 京都市の西北部 昔の大内裡のあとに當る 醍醐 京都市の東山區にある名刹醍醐寺 大佛 洛東方廣寺 豐臣秀吉創建

此の他、紀州征伐のときには和歌浦・玉津島にて、小田原陣の折には清見潟にて、征韓の役には肥前の名護屋などにての詠歌も少からず。天正十六年の聚樂第への行幸のときは勿論醍醐の花に、大佛の月に、その折々の歌多く、時としては、大宮人の昔を忍ばしめ、又時としては、古英雄の横槩賦詩の面影を想はしむ。而して、功成り名遂げたる此の千古の偉人にも、亦無常を感じたる事のありてや。

露とちりしづくときゆる世のなかに何とのこれる心なるらん 露のちりしづくときゆる世のなかに何とのこれる心なるらん

と嘆きし事もありしが、慶長三年八月卒去せらるゝや、哀れにも、

露とおき露と消えにし我が身かななにはのことは夢の

また夢

横渠賦詩
 魏の曹操の故事
 伊達政宗
 仙臺藩主
 名將・歌人
 寛永十三年(三三〇)卒
 年七十
 贈從二位
 細川忠興
 幽齋藤孝の子
 三齋と號す
 名將・歌人
 豊前國主
 正保二年(三〇五)卒
 年八十二
 贈正三位

屏東
 臺灣高雄州屏東街

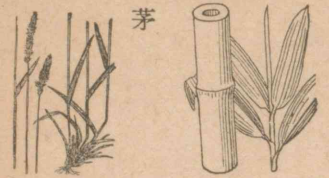
といふ辭世の短冊をとゞめられき。げに、太閤は伊達政宗細川忠興等と同じく、其の頃の武人にして文藻ありしうちの錚々たる者なりしなり。確に太閤の自筆と認めらるゝ消息若しくは短冊にして、予が原本を目撃したるものみにも、二三十はあるならん。加之、太閤は、時には學者をして往事を談ぜしめて之を聴き、又、禪學の書の講義をも聴きたりき。我が國人が誇るに足るべき此の大偉人は、決して無學文盲ならざりしなり。(史學會雜誌)

一四 瑞竹の林

屏東にある臺灣製糖株式會社の庭には、みづくしい瑞竹の林があります。それがかく繁茂するに至つた由來には、世にも有

行旅

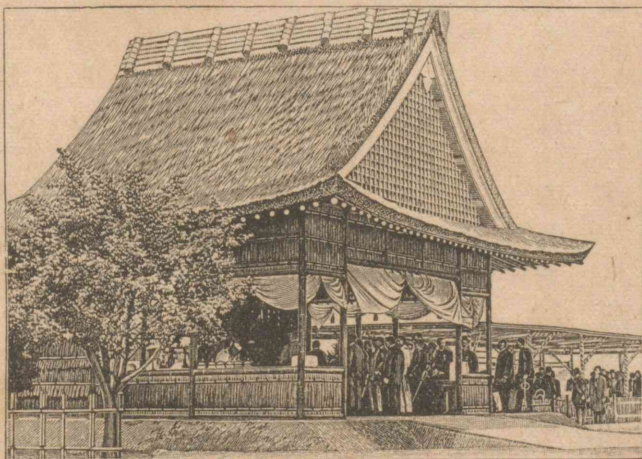
蕨竹



茅

難く尊い話が織込まれてゐるのです。今上天皇陛下がまだ東宮におはしまして攝政でいらせられた頃、時は大正十二年四月、臺灣へ行啓あらせらるゝ旨仰出がありました。これを承つた全島の同胞は歡喜に堪へず、その輝かしい日を足つまだてて待つてゐました。まして、南方僻遠の地にある臺灣製糖株式會社では、畏くも行啓の内命を拜して、社長以下従業員一同は、思ひもかけぬ有難き思召に感激し、奉迎の準備に至誠をさゝげていろくくと心を碎きました。まづ御休憩所として、綠色濃き臺灣特産の蕨竹を柱とし、茅で葺いた清楚な小亭を造營することにしました。早速、臺中州の竹山に人を遣はして、竹を伐出させ、色の損ぜぬやうに菰で包み、注

意に注意を加へて廻送させ、謹んで建築に着手しました。たま
 たま宮中の御都合で、行啓の御
 日程が變更になりましたので、
 竹の柱には十分手當を加へま
 したが、日がたつまゝに、緑の色
 はあせて、光澤がだんくゝ悪く
 なつて行きました。これはと
 案じて居りますと、愈、行啓の數
 日前になつて、不思議や、竹の柱
 の節のところくゝから、新芽が
 出て來ました。伐採後四十日
 にも近い竹から、かうして芽が出るといふのは全く例のない事



御休憩所に於ける攝政殿下

なので、これぞまさしく瑞祥である。心なきものにもかく感應
 があるか。と、見る人毎に語り合つてゐました。
 いよゝゝ行啓の當日になりますと、その芽は既に伸び伸びて、五
 六糎から十二三糎に達するものさへありました。攝政殿下に
 は親しく工場、農場等を御巡覽あらせられた後、やがて新築の御
 休憩所に入らせられました。ふと件の竹の芽にお目にとまり、
 いと興味深く思ひ召されて、御手をさへ觸れさせられ、種々御下
 問の御言葉もありました。
 さて殿下の還啓を奉送してから、會社では今日の光榮を、一は臺
 灣糖業の爲、一は會社の爲に永遠に記念する方法について協議
 致しました。その時、第一に、さうして異口同音に唱へられたの
 が、この瑞祥を育てあげて、竹林に仕立てようといふことでした。

だが、その方法については誰にも自信がありません。意見はまちまちで、麻竹の芽が育つだらうか。伐つた竹が芽ぐむのは、ほんの一時で、やがて萎みはしまいか。要するに、我等の希望が一つの空想に終らねばよいが、などと、歎聲を洩らす者も多くありました。

「百の評定も一の實行に如かず。ともかくも最善を盡くしてやつて見ようではないか」といふことに衆議が一決しました。すぐに竹の栽培に精通した人を竹山から招いて、様々に手を加へさせましたが、その人は数日の後、到底私どもの手には合ひません」といつて、辭して歸りました。「このまゝ手を束ねて見ては居られない。よし、栽培法は知らずとも、眞心こめてこの若芽を育て上げずにおかうか」とは、すべての者の意氣込でした。そこで

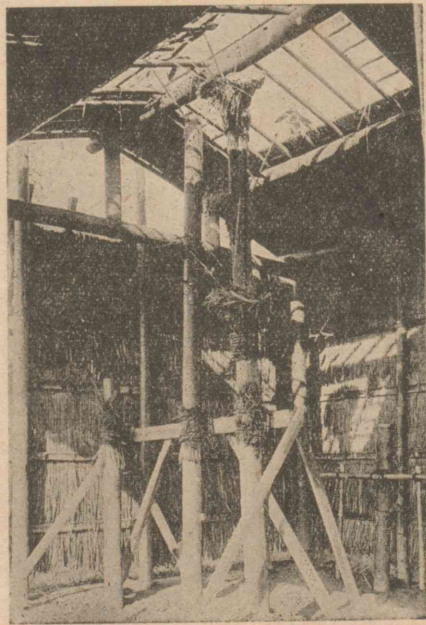
柱を覆うて、日光を避け、芽の所を蓆で包み、その中に土を盛つて、朝夕水を與へました。

芽は日にくく伸びて、七八十糎に達しました。

一同の喜といつたら譬へやうもありません。

ある日、芽の上下適當な所で竹を切離し、御休憩所の柱の跡、九箇所にこれを植込みました。

一同の至誠は遂に天に通じて、竹は日ましに茂つていきました。九株が九株とも、健全に育つていきました。さうして、やがてど



芽の柱竹の中養培

竹の園生
親王又は皇子の
稱
支那の梁の孝王
といふ王子が竹
園に居つた故事
から出た語

の株からも續々と若竹が出て來ました。

これを見た一同は、心から嬉しく、竹の園生の御榮もかくこそと御祝ひ申し上げ、この度の行啓とこの瑞祥とを記念する爲に、碑

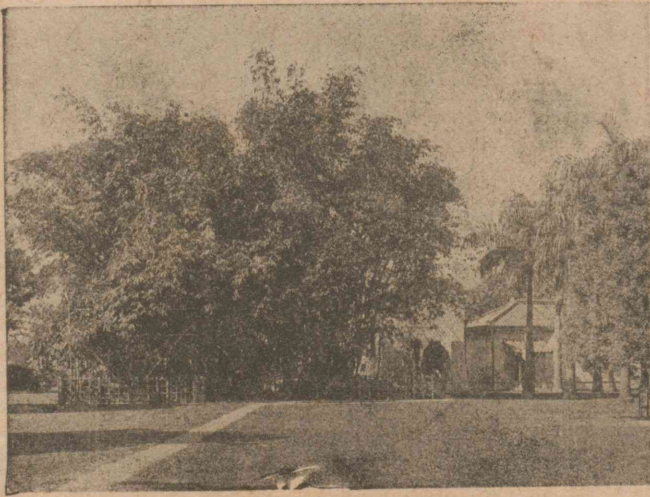


行啓記念碑及及び記念館

を御休憩所の跡に建てて、その謂はれを文にして彫りつけました。瑞竹は茂りに茂つて、やがて碑を覆ひ、今ではもう一大叢林となりました。これ偏に殿下御高德の致す所と存じます。

洩承る所によれば、行啓のみぎり、御供の人々が、屏東は暑さの烈しい處でございませうとお氣遣ひ申し上げますと、殿下には、いかに暑くとも、人の働いてゐる處ならば、と仰せられて、行啓遊ば

されましたとか。この御一言で、熱帯に働いてゐる臺灣在住の同胞たちが、どれほど感激したか知れませぬ。昭和の大御代になつて、遠く行啓の日を思ふと、感殊に深きものがあります。人の働いてゐる處ならば、と仰せられた畏き大御心を奉戴し、至誠天に通ず、といふ信念を以て進みましたら、國運の隆昌は期して待つべきであります。瑞竹の林がさやくと微風に戦ぐその聲は、常にこの一事を物語つてゐるのではありますま



瑞竹林の全景

入江子爵

入江爲守
皇太后宮大夫
御歌所長
子爵
京都の人
昭和十一年卒
年六十九

いか。

當時の東宮侍從長入江子爵は、この瑞竹の茂りに茂り行くさまを傳へ聞いて、感に堪へず、

日のみこの榮えますらむゆく末をはやしとなれる竹に
みるかな

とお詠みになりました。

その後會社では、件の御休憩所の竹の柱で、記念のため花生四基を謹製致しました。さうして一基は天皇陛下、一基は皇后陛下、一基は皇太后陛下に奉獻し、残る一基は、會社の行啓記念館に飾りつけたとのことであります。(蘆田惠之助の文による)

一五 鶏

薄田泣菫

薄田泣菫
名は淳介
文學者
明治十年(一五七)
岡山縣生

ふと眼がさめた。頭を持上げて寢臺の小窓へ目をやると、戶外はまだ墨汁のやうに眞暗らしかつた。そのまゝうとくとしてゐると、どこからか雄鶏の曉を告げる甲高な強い鳴聲が聞えて來た。

「鶏が鳴いてるね。どこか近所で飼つてゐるとみえるね。」

私は誰に話しかけるともなく、そんなことをいつた。隣の室では、家の者が寢返でも打つたらしい物音が、もぞくさと聞えた。

「あれはお隣の鶏ですよ。ついこなひだまで雛兒ひなごだつたのに、もう時を告げるやうになつて……」

家の者は寐ぼけ聲でこんなことをいつたやうだが、その次の瞬間には、すぐにまた寐ついたらしく、すやくといふ寐息の音が微かに聞えて來た。

私はじつと臉を合はせてみたが、なか／＼容易には眠られなかつた。

曉を告げる鶏の聲。あの聲こそは、私がそれと氣づかないで、年久しく私の生活から失つてゐたものだつた。小さな農村に生まれて、そこで少年の頃を過した私にとつては、鶏は私の生活の一部分に外ならぬものであつた。私たちは日毎々々、夜がまだ全く明けはなれないうちから、程なく曉が來ることを雄鶏によつて教へられたものだ。その聲は、なほ名残を惜しんでそこらに逡巡する夜を蹴散らして、やがて明けゆくその日をしつかりと把握するに足りるほど朗かで、雄健なものだつた。私たち農家に生まれた者は、晝間の働でどんなに疲れてゐようとも、夢うつゝの境にその聲を聞きつけると、

小さな農村
岡山縣淺口郡連
高町

「もう朝がやつて來たのだ。」

と、どうかするとまだ寢床の中に居残らうとするなまけ心に鞭打つて、すぐにも起上らねばならなかつたのだ。

それほどまでに雄鶏の持つ比類のない敏感さは、しのゝめ時のあるかなきかの薄明りの動きをも暗黙の間に傳へ、その雄健さはまた、曉そのものの持つ、生まれたばかりの新鮮さと雄々しさとを感得してゐるのだ。

いくら鶏舎の扉を嚴重にしめきつても、どんな微かな光線をも許さぬほど、こまかに隙間々々を目張しても、そんなことには一向頓着なく、眞暗な鶏舎のなかの雄鶏が、いち早くも東天に搖曳する曉の仄かなおとづれを感知するその感性は、一體どこから來たものだらうか。眞暗な鶏舎のなかにゐて、いち早く曉を知

りもし、唱ひもするのを解釋して、それを天鷄の遠音のせみだと
してゐるのは、間違つたことではないが、その天鷄は人間の想像
を絶するやうな大樹の枝にとまつてゐるのではなく、實は血紅
色の鷄冠をかぶつた雄
鷄の感覺の中に棲んで
ゐるのだ。

それは彼等の祖先が、今
も印度の深い森の中に
ゐる野鷄たちと同じく、
その樹の陰、こゝの草
の中をあさり歩いてゐた頃から持ちつたへた、知られぬ感性に
相違なかつた。



鷄
鳴 (筆天彩村田)

昔は、山に籠つて修行に専念しようとするには、何をさしおいて
も、自分と一緒に羽の白い鷄と毛並の白い狗とだけは、必ず連れ
て往かなければならぬことになつてゐた。白鷄と白狗とは、深
山の邪氣を拂ふのになくてならぬものにせられてゐたらしい。
どんな理由から白色のものが選ばれることになつたか、それは
知らないが、深山に隠れて靜かに思惟の生活に浸つてゐるもの
にとつては、見馴れぬものを咎める狗の叫と、夜明を告げる鷄の
聲とは、めつたに缺くことのできないものだつたかも知れない。
「その日くゝの立派な豫言者だ」

私は寢床の中で寢返を打ちながらさう思つた。この紅い鷄冠
を被つた豫言者を自分たちの家に飼ふことによつて、農夫たち
が一年三百六十朝、しめ時のつめたいすがくしい大氣と、

明かるい心と、健康とを、それ／＼自分の家へたつぷりと取込む。それは何といふ手輕な、そしてまた幸福なことだらうと、私はまた思つた。

私はそれから何を思つたかをよく知らない。たゞおぼえてゐるのは、とかくするうちに、私がぐつすり寐ついてしまつたらしいことだけだ。

目が覺めたのは、もう八時に近い頃で、西向きの小窓から見ると、隣と地つゞきの空地には、靜かな冬の朝の明かるい日光が溢れてゐた。その中を雄鷄が一羽、金色の羽をきら／＼させながら、多くの雌を引連れて、鷹揚に歩いてゐるのが見られた。

「てつきりあの豫言者だ。」

私はさう氣がつくと、暫くじつとそのそぶりを見てゐた。

(獨樂園)

一六 文章の道

島崎 藤村

十七八歳の頃、私は隅田川でよく泳いだことがある。全く水には經驗のなかつた私も、漸く岸を離れることが出来るやうになり、次第に川の中流までも進み得るやうになつて、一夏も水泳場へ通ふうちには向かふの河岸まで泳ぎ越すことが出来た。更に又一夏も泳いで見たら、あせつて水ばかり飲んで居た頃によくも分らなかつた水瀬の速い遅いも分つて來たし、眞水と潮水の混り合つたあの川の中の冷いと温いも分つて來たし、水鳥の

島崎藤村
名は春樹
詩人
小説家
帝國藝術院會員
明治五年(三五)
長野縣木曾生

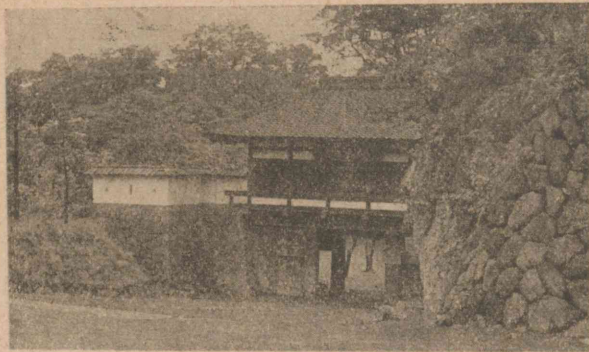
やうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の光景を、泳ぎながらに見ることも出来た。板子なしには溺れるの外なかつた私も、二夏の末には優に隅田川を往復した。私は普通の泳ぎ手が行けるところまでは自分も到達し得たやうに感じたけれども、それ以上に進むことはなかく、容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身の出来る人を見たり、拔手の上手な人などを見た時は、全く感嘆してしまつた。文章の道にも、誰にでも到達し得られるやうな境地があるに相違ない。そして根氣さへあれば、そこまで行くことは決して難くないに相違ない。

小諸

長野縣北佐久郡
小諸町
浅間山の西南方
千曲川の右岸

明治三十二年(明治三十五年)

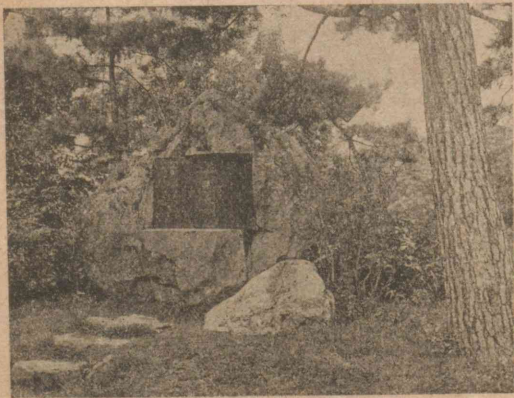
信州の小諸に居た頃、私は弓をやつたことがある。誰でも最初の間は的に向かつて矢を當てることばかりを心掛ける。唯當



小諸城址

りさへすればいゝ。さういふ時代には幸に一本の矢が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひもよらぬ小場所へ飛んで行く。射手の心に恃むところもな

る力もなく、さうして幸に當つた矢は、高慢で煩い「熟練」を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で



藤村詩碑

弓術に心得のある老人が私たちの矢場へ來た。その老人が先づ「姿勢」を正すことを私たちに教へてくれた。それからの私たちの矢は、假令的を貫くことが出來ないやうな場合でも、一手づつ揃つて同じ場所へ行くやうになつた。これは文章の道にも當箝めて見ることが出来る。唯面白い文章をのみ作らうと思つて焦心することは決して目的を達する道でない。眞に好き文章を作らうと思ふものは、どうしても先づ「自己」から正してかからねばならない。

同じ頃、私は家の裏の畠へ出て、鋤を執つたことがある。讀書のかたはら、よくその鋤をかついで行つて土を耕して見た。私は先づ荒れた畠の地面を掘起すことから始めた。土を碎いた。

小石を擇りわけた。地ならしをした。汗を流してそれをやつた。葱の苗や馬鈴薯の芽のやうな植ゑやすいものから作つて見た。その畠には、大根・白菜・茄子・豌豆・胡瓜などの類をも植ゑて見た。草を取りに行き、肥料をやりに行つた。馬鈴薯の花が白く咲くころにいつて、試に土の中を探つて見ると、はや圓いやつが幾つも幾つも根元の方から出て來た。豌豆の蔓が長く伸びて人の脊よりも高くからみついた畠の中には、嫩く生つたのを摘む鋏の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうになつた。それから私は周圍にある耕地を見て廻り、本當の百姓の手で好く整理された畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に自分の身に感じられるやうになつた。私はある耕地を通つて、非常に嚴肅な念

に打たれたことを今でもよく思出すことが出来る。われ／＼が文章の手本とすべきものは何程われ／＼の周圍にあつても、それを悟らないことには仕方がない。それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければならぬ。「試みる」といふことは、「悟る」といふことの初だ。

浅草の新片町に住んだ頃、家は浅草橋や兩國橋に近くて、私はあの隅田川の界隈を漕ぎまはつたことがある。最初のうちは無闇と手足を動かさし、あの長さ一丈ばかりもある艀を前へ押し手許に引きして骨折つて見た。それでも舟は思ふやうに進まなかつた。次第に私は手足を動かすことが少くて、身體全體の力で、ゆつくり艀を押すことが出来るやうになつた。向かふから

浅草橋

神田川の下流に

架けた橋

兩國橋

隅田川に架けて

日本橋區と本所

區とを連絡する

橋

傳馬

はしけ舟

荷物や人馬の上

げおろしに用ひ

る小舟

大きな傳馬がやつて來たぞ、あいつに一つ衝突らないやうに、さう思つて漕いで行く楽しみなどもそれから起つて來た。それから船頭のするところを見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには力の省略がある。「簡素」の美がある。文章の道にも、無闇と筆を弄することが、決して自己の眞の「表白」とはならない。眞に好い文章には、眞に好い「結晶」の力がある。

すぐれた人の書いた好い文章は、それを黙讀翫味するばかりでなく、時には心ゆくばかり聲をあげて讀んで見たい。われ／＼はあまりに黙讀に慣れすぎた。文章を音讀することは、愛なくしては叶はぬことだ。
(藤村全集—藤村讀本)

槍岳

飛騨信濃の國境に跨る日本アルプス中の最高峰海拔三千百餘米芥川龍之介文學者

東京生昭和二年歿年三十六橡七葉樹科の落葉喬木

新見朝 大正七年 小説書

一七 槍岳へ

芥川龍之介

山の岨を一つ曲ると、突然私たちの足もとから何匹かの獸が走りだした。

「畜生！ 鐵砲さへあれば逃しはしないのだが。」

案内者は足を止めて、忌々しうに舌打をしながら、路ばたの橡の大木を見上げた。橡の若葉が重なり合つて、路の上の空を遮つた枝には、二匹の小猿をつれた親猿が、靜かに私たちを見おろしてゐた。私は物珍しい眼をあげて、その三匹の猿の徐に梢を傳つて行く姿を眺めた。が、猿は案内者にとつては、猿であるよりも先に獲物であつた。彼は立去り難いやうに、橡の梢を仰ぎながら、礫を拾つて投げたりした。

「おい、行かう。」

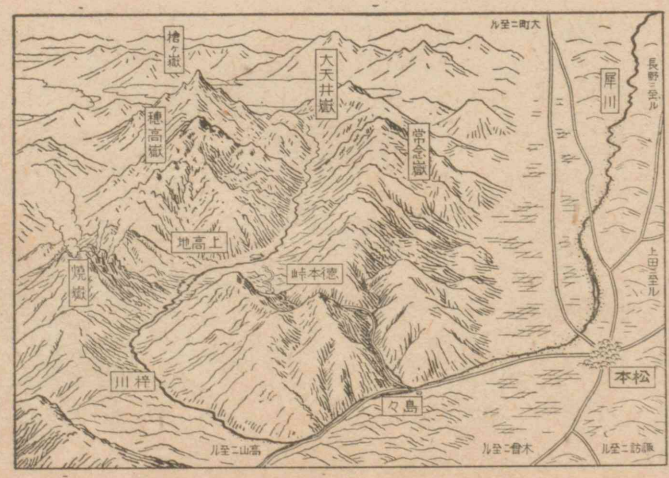
私は彼を促した。彼は猶猿を見送りながら、澁々歩きだした。私は多少不快であつた。

路は次第に險しくなつたが、馬が通ると見えて、馬糞が處々に落ちてゐた。さうしてその上には、蛇目蝶が澁色の翅を合はせて、一杯にとまつてゐた。

「これが徳本の峠です。」

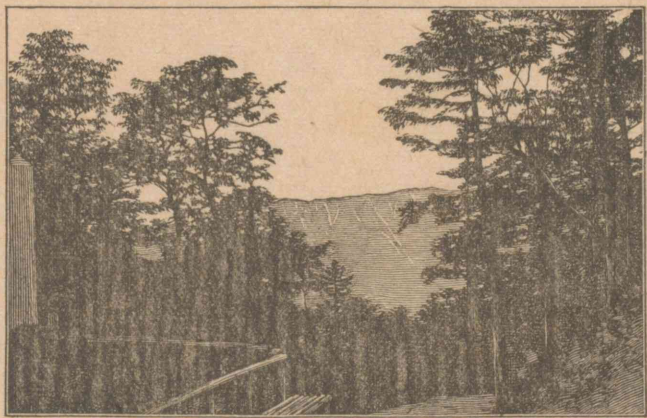
案内者は私を顧みて言つた。

私は小さい雜囊の外に何も荷物のない體であつたが、彼は食器



近 附 地 高 上

徳本峠 長野縣島々から上高地へいく峠海拔二千百餘米日本アルプスの一關門



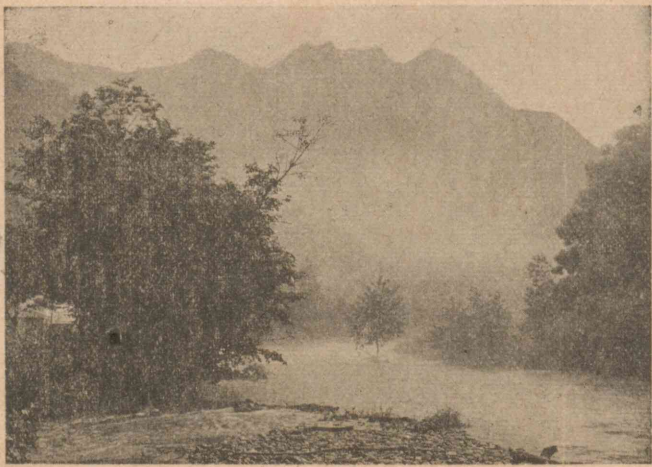
熊笹の麓
程静かき

や食糧の外にも、私の毛布や外套などを堆く背負つてゐた。それにも拘らず、峠へ懸ると、彼と私の距離は段々遠く隔り始めた。三十分の後、とうとう私はたつた一人山路を喘いで行く旅人になつた。うす日に蒸された峠の空は無氣味な静寂を孕んでゐた。馬糞にたかつてゐる蛇目蝶と塵を煽つて行く私とそれがこの急な路の上に生きて動いてゐるすべてであつた。

と思ふと、鈍い翅音がして、青黒い一匹の馬蠅がべたりと私の手

梓川
長野縣南安曇郡
槍岳と常念岳と
の間から出る川
下流は犀川といふ

の甲にとまつた。さうしてそこを鋭く整した。私は一打にそれを打殺した。「自然は私に敵意を持つてゐる。そんな迷信じみた心持が一層私をわく／＼させた。私は痛む手を抱へながら、無理やりに足を早めだした。その日の午後、私たちは水の冷たい梓川の流を徒渉した。川を埋め残した森林の上には、飛驒信濃境の山々が、殊に薄曇つた穂高嶽が、嶄然と私たちを見下してゐた。私は無愛想な案内者の尻について、漸く對岸を蔽つてゐる熊笹



川 梓

山毛櫨
落葉喬木
高さは二十五米
にもなる

雁皮
落葉灌木
高さ二米位
夏黄色い花が咲く

の中へ辿り着いた。對岸には大きな山毛櫨や樅ヒノキがうす暗く森



種 高 嶽

森と聳えてゐた。稀に熊笹が疎らになると、雁皮らしい花の黄色く咲いた、濕氣の多い草原の中に、放牧の牛馬の足跡が見えた。程なく一軒の板葺の小屋が熊笹の中から現れて來た。案内者は小屋の戸を開けると、背負つてゐた荷物を其處へ卸した。小屋の中には大きな圍爐裡が寂しい灰の色を擴げてゐた。案内者はその天井に懸けてあつた長い釣竿を取卸してから、私一人を後に

白樺
落葉喬木
高さ十餘米
樹皮は白い
葉は卵形

残して、夕飯の肴のために梓川の山魚ヤマウナギを釣りに行つた。私は塵や雜囊を捨てて暫く小屋の前をぶらついてゐた。すると、熊笹の中から大きな黒斑カクの牛が一匹のそく側へやつて來た。私は稍不安になつて小屋の戸口へ退却した。牛は潤んだ眼マツコをあげて、じつと私の顔を眺めた。それから首を横に振つてもう一度熊笹の中へ引返した。私はその牛の姿に愛と嫌惡イヤミとを同時に感じながら、ぼんやり巻煙草に火をつけた。

曇天の夕焼が消えかゝつた時、私たちは圍爐裡の火を圍んで、竹串の炙つた山魚を肴に鍋で炊いた飯を貪り食つた。それから毛布に寒氣を凌いで、白樺の皮を巻いて作つた原始的な燈火をともしながら、夜が戸の外に下つた後も、いろく山の事を話しかつた。白樺の火と櫓の火と、この明暗二種の火の光は、既に燈

火の文明の消長を語るものであつた。私は小屋の板壁に濃淡二つの私の影が動いてゐるのを眺めながら、山の話のとぎれた時には、今更のやうに原始時代の日本民族の生活などを想像せずにはゐられなかつた。



白樺の林

陀にして、眼の前に開けた光景を眺めた。

雑木の重なり合つたのを排いて、もう一度天日の光を浴びると、案内者は私を顧みながら、「此處が赤澤です。」

といつた。私は鳥打帽を阿彌



黄花駒の爪

私の前に横たはるものは、立體の數を盡くした大石であつた。それが狭い峡谷の急な斜面を満たしながら、空を劃つた峯々の向かふへ目の届く限り連つてゐた。

もし形容の言葉をつければ、小さい私たち二人は、正に遠い山嶺から漲り落ちる大石の洪水の上にあるのであつた。私たちはこの大石の溢れた谷を、黄花駒の爪の咲いてゐる谷を、蟲の通ふやうに登りだした。暫く苦しい歩みを



羊 鈴

黄花駒の爪
黄色な花の咲く
壺葦

羚羊
鹿より小さく角
には木がない



てその日も暮れかゝる頃、私たちの周囲には、次第に残雪の色が

絶壁の上を指さしながら、
「御覽なさい。あすこに青猪が
ゐます。」

といつた。私は彼の杖に沿うて
視線を絶壁の上に投げた。する
と荒削りの山の肌が頂に近く偃
松の暗い線をなすつた處に、一匹
の獸が小さく見えた。それが青
猪といふ異名を負つた日本アル
プスに棲む羚羊カシカであつた。やが

ラスキン
英國の文學者
美術批評家
○(西曆一八六一—一九〇

多くなつて來た。それから石の上に枝を擴げた寂しい偃松の
群も見え始めた。私は時々大石の上に足をとめて、何時か姿
を露しだした槍岳の絶巔を眺めやつ
た。絶巔は大きな石鑱のやうに、夕焼
の餘炎が消えかゝつた空を、何時も黒
黒と切抜いてゐた。「山は自然の始に
してまた終なり。」——私はその頂を眺
める度に、かういふ文語體の感想を必
ず心に繰返した。それは確かラスキ
ンの中にある言葉であつた。
その内に、寒い霧の一團が、もう暗くなつた谷の下から、大石と偃
松との上を這つて、私たちの方へ上つて來た、さうしてそれがあ



鳥 雷

たりを包むと、小雨交りの風が俄に私たちの顔を吹きはじめた。私は漸く山上の寒さを肌に感じながら、一分も早く今夜宿る無人の岩室に辿り着くべく、懸命に急角度の斜面を登つて行つた。が、ふと異様な聲に驚かされて思はず左右を見廻すと、あまり遠くない偃松の茂みの上を、流れるやうに飛んで行く褐色の鳥が一羽あつた。

「何だい、あの鳥は。」

「雷鳥です。」

小雨に濡れた案内者は、強情な歩みを続けながら、無愛想にかう答へた。(芥川龍之介全集—うめうまうぐひす)

一八九十九里濱

徳富健次郎

徳富健次郎

號は蘆花

文學者

熊本縣水俣町生

昭和三年歿

年六十

大東

大東崎

千葉縣夷隅郡大

東村にある岬

飯岡の岬

千葉縣海上郡飯

岡町にある岬

ながらめ貝

とこぶし

あはび貝に似て

小さいもの

潤さ一町餘、長さ十六里半の此の大きな砂濱は、人の子の生活の戦場で、同時に其の遊び場でもあります。風雨の中の舟の引揚、一時を争ふ漁舟の乗出し、地曳の網の揚り際、男は赤裸、女は眞顔でえい〜聲を出す時は、自然を相手の戦争といふ感じがひしひしと人を壓します。併し風雨が過ぎて二三日、右に大東、左に飯岡の岬もあり〜と見えて、空青々と、日麗かに、心地好い程の南風がそよ吹いて、萬里一碧の海的笑顔に愛嬌ばかりの白波を立てる日は、向かふの方でながらめ貝を搔く男も、眞裸で子供の風呂桶程ある飯櫃引寄せて、立ちながら茶漬を食つてゐる赤銅作の仁王様も、一帳羅の晴着を汗にしまいとしてそれを風呂敷に包んで背負つて、紅い襦袢一つになつて波打際を行く田舎娘も、街道の砂埃に引換へてしつとりと弾力ある波打際の砂路を荷



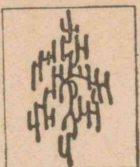
濱 里 九 十 九

馬車挽かせて行く向鉢巻の男も、自轉車の小僧も、砂の上に坐つて日がな一日暢氣に網を繕つてゐる爺さんも、子供のおもちゃに小蟹を捕らうとして懸命に両手で穴を掘つてゐるかみさん、人形のやうな兩手を舉げて家鴨の蹠のやうな兩足でよちよち走つて来る三歳の女兒も、其等を見てゐる私どもも、鬼が居ない賽の河原の砂遊をしてゐる一樣の子供としか思はれません。誠に人生は嚴肅であります、又快活であります。

松皮模様



朽木形



玉目形



此の砂濱は大きな畫布キャンパスであります。色々のものが色々のものを描きます。風が掃ひ、雨が流し、波が洗ふに任せてゐる此の畫布の上に勿論不朽とか無窮とかは許されません。しかし刹那の物にも人間の不朽よりめでたいものはあります。第一にめでたい波の手の跡を御覽なさい。波は生きてゐます。生きた波の手の跡に、波の氣分の顯れてゐないのはたゞの一筆だつてありません。彼は好んで砂をしぐらに織ります、松皮模様を描きます、鰐皮を作ります。朽木型、匏たまりをかけた玉目形。頗る意氣な綾や縞も彼の手作りです。大人の足跡、子供の足跡、轍の跡、馬の足跡。大きな梅花模様は犬が行くく描いたのです。不具な楓の三本趾、鳥にしては大勝なのは鳥に相違ない。ひよいひよいとやゝしばらく續いて、何かに驚いてぱつと飛立つたらし

いです。小さなく模様の小刻みに右につゞいて左に折れ、また翻つてもとへ戻つて居るのは、千鳥か何ぞの心の曲折を語つてゐます。蟹の足跡があります。貝のあるいた跡があります。ある時、小さなく刷毛で、ばつばと描いたやうな織いく半月形を、これは何だらう、一體何が描いたのだらうと、よく見て居ると、龍の鬚に似た小さな草がそ知らぬ顔して、私ちやありません。と織い首を掉つてゐました。

九十九里に往つた最初は七月といつてもしけがちで、この大きな海を前に控へながら、毎日豆腐や、粕谷から持參の甘藍、豌豆、伊香保の干蕨の類ばかり食つてゐる日が續きました。その内二週間もたつと、七月も半ばになつて、鱒の地曳網が始まりました。私どもの歸る頃は鱒も大きく、味も大分よくなつてゐました。

粕谷

今の東京市世田

谷區粕谷町

作者の居住地

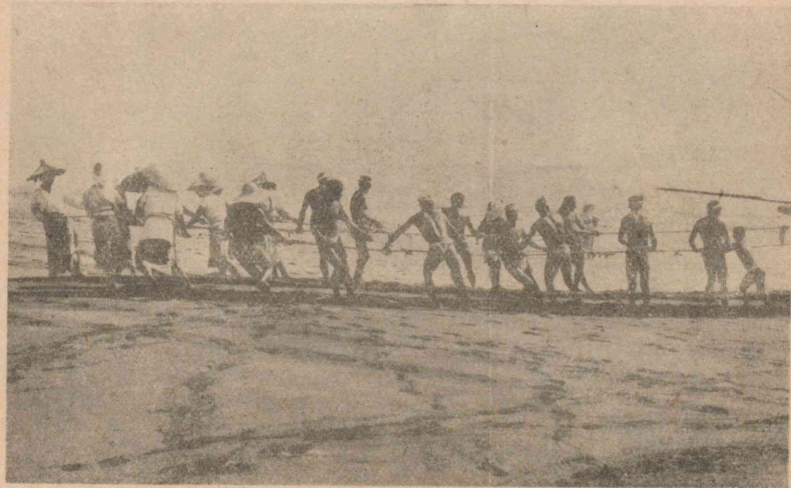
伊香保

群馬縣群馬郡伊

香保町

朝暗い中から拍子木が鳴ります。それは地曳の始る知らせです。私が浴衣一枚で海水浴に出る頃は、大抵もう曳き始めてゐました。よく風いだ朝などは、地曳の組が、幾組もく南に北に並んでゐます。霧の中に小さく見える組、もう眼に入らぬ遙かな遙かな組もあります。なる程九十九里は大きな濱です。腰と踵に力を入れて、急がず休まず永劫につゞくかのやうにじわじわ曳くのも、見てゐて力が入るものですが、網の目標の浮樽が見えて來てからの活氣はまた見物であります。小一町も離れて曳いてゐた南北二列の曳子が、追々近寄つて來たかと思ふと、一方の列が綱を抱へながら、えつさくと他の一列の方へ馳寄ります。鉢巻の赤裸男がざぶんと海に飛込んで綱元へ廻ります。棒手振が寄つて來ます。やつさ籠が幾つもく並べら

れます。波打際では、其方曳
 け、此方しほれ」と、網主が罵り
 わめいてゐます。私共も砂
 の上から立上つてそろ／＼
 波打際へ向かひます。もう
 綱は盡きて、繩網が見えて來
 ました。その或ものは向鉢
 巻腰膚脱いだいゝ加減な婆
 さん、かみさん、娘までが、ざぶ
 ざぶ海に飛込んでいつて、件
 の繩網を攫んで、一抑一揚、歌
 で拍子を取りながら引張り



地 曳 網

ます。名物の地曳唄はこれです。中でも年配の女が金切聲で
 音頭を取ります。皆が續いて囃します。彼一句是一句、歌つて
 は曳き、曳いては歌ふ。抑へて、揚げて、屈んで、伸びて、右の片足を
 ひよいと上げて、拍子も調子も面白く、網は段々上つて來る。一
 様な節の間々に「何とか何とかやあい」と一齊に囃すときの面白
 さ。もう網が見えて來ました。網の繼目を全速力で解く。海
 に潜つて網の囊をしぼる。眞裸の網主が咽喉も裂けよとわめ
 く。一切の男女はぐるりと網に取りつき、何とか何する何とか
 何せい、何とか何とかやあいをやはり歌ひ續けながら、網を手繰
 つては撥ね、しほつては撥ね、段々囊の底へ魚を寄せて行きます。
 子供が攜網たを持つてたかります。もう網の中は、さつきから鱈
 や鯖の青光り白光りが、ばたく／＼ばたく／＼ごつたがへしてゐま

す。鯨の千五六百ははいるやつさ籠が持つて來られて、一杯に
なると、向鉢巻、雙肌脱ぎの女たちが二人で籠の縁を攫んで、やつ
さ、やつさで濱へ持つて行きます。どうと置くこともあり、引繰
返すこともあり。いやもう盛なことです。

地曳通ひは私どもの日課でした。私はかく自ら嘲りました。
地曳すればわれも鷗と飛んで來つ魚獲んとして去りが
てにする

拍子木が鳴るといそぐ飛んで濱に行き、獲物を手に入れるま
ではうろついて立去らぬ私は、魚欲しさうに地曳網の中を往つ
たり來たりするあの鷗や、みさごや、かいつぶりさんたちに似寄
つたものでした。(蘆花全集—新春)

相馬御風

名は昌治

文學者

明治十六年(三十五)

三新潟縣生

一九 田家の朝

相馬御風

笈をおちる水の音を聴きつゝ、いつしか深い眠に沈んでゆく—
—さうした田家の夜の静けさも懐かしいが、それ以上に、私は朝
の寐覺に笈の水の音を聴くすがくしさを好む。

笈の水の音は、田家の夜と朝とを詩味あらしめる要素のやうに
私は思つてゐる。それは僅かに細い一本の竹筒の口を漏れる
水の音でしかないが、しかも、何といふ大きな魅力をそのうちに
藏してゐることであらう。それが、一家の者の生命をつないで
ゆく上になくてはならぬ貴いものであることは言ふまでもな
いが、それを外にしても、私たちには、山の水を取入れる爲の笈を
持つた田家の詩味が、たまらなく懐かしくも又羨ましくも思は
ずにはゐられない。

朝の寐覺に我知らず耳を傾ける筧の水の音のすがくしき。それが筧を落ちるのでなくて、直に山腹の岩間からことくと流れ出る泉であれば、その音のすがくしきには神祕な味はひさへも加つて、私たちの心に一層貴い静けさを與へてくれる。水の音を聴きながら眠り、水の音を聴きながら目覺めた刹那の心の静けさは、田家に住む人々に與へられた大自然の最も大きな恩惠の一つである。

私は嘗て或山奥の一軒家にとめてもらつたことがあつた。その時もやはり、私の寢てゐる枕に近く筧の落ちる水の音がしてゐた。安らかな眠から覺めたばかりの私の耳に、その水の音は、おのづと爽かな響を傳へた。私は何といつてみようもないすがすがしさと、静けさと、安らかさとに心身を抱かれながら、その

水の音に聴きほれてゐた。

部屋の中はまだ暗かつた。しかし私は、それが眞夜中であるか、朝であるかといふことさへも考へなかつた。私はたゞうつとりと、やすらかな寐覺のこゝろよさにひたつてゐた。

その時、ふと、私はどこからともなく響いてくる鈴の音を聞いた。そして、それが馬の頸に下げられた昔ながらのあの鈴の音であることを、私はすぐにたしかめることが出来た。

じやらんくく……



朝
草
(筆揚華口山)

鈴の音は段々近づいて来た。

それにつれて、はつたん／＼といふ藁の杵をはいた馬の足音も刻々に近く聞かれるのである。

その馬の鈴の音と足音とが、はじめて私に朝を感じさせた。

「あ、もう草刈に行く人がある。夜が明けたんだな。」

さう思ふと同時に、私は起きあがつて、雨戸を明けにかゝつた。

あの時のすが／＼しかつた氣持を、今でも私は忘れることが出来ない。

田家に住む人々は、いづれも早起である。若い人たちは、日の出る前にもう山の草刈から戻つて来る。老人たちの朝飯前の仕事は、藁打と草鞋づくりとである。

とん／＼／＼……

朝まだ暗いうちから、藁を打つ槌の音があちらでもこちらでもする。たまには、その音を拍子にして唄を歌つてゐる人もある。鶏舎では鶏が盛に鳴いてゐる。

山家に泊つて、早朝谷川へ顔を洗ひに行く氣持も、私にはたまらなく懐かしい。

清流に口をすゝぎ、顔を洗ひ、頭をひやすことの快さはいふまでもないが、私はそれ以上に、清流に口をつけてすぐに流を飲むことの快さを愛する。

草の上に、又は岩の上に寝そべり、顔を清流の上に差出して流に口づける。水は容易に口の中にはいらぬものであるが、しかし、さうして飲む水の味と、手や何かで掬つて飲む水の味とは、まるで違つてゐるやうな氣がする。「流を飲む」さうした氣持だけ

でも既に嬉しいものである。
手で掬ひあげた水に曉の空の光の映つた感じもいゝ。

(郷土に語る)

萩野由之

國史家
文學博士
東京帝國大學名譽教授
帝國學士院會員
新潟縣和川町生
大正十三年卒
年六十四

二〇 東國武士

萩野由之

武勇な氣風の盛な時代には、何處の國にも、決闘がはやつた。決闘とは命がけの喧嘩である。人の生命は君國の爲にこそ毛よりも軽いが、個人同志の意地張の爲にあたら生命を棄てるのは愚の至である。尤も卑怯の舉動をなし、臆病者となり果てるよりはましであらうが、畢竟は血氣の勇にはやる結果だから、賛成が出来ない。

とはいへ、日本の平安時代に於て、この決闘が或種の人々の間に

行はれた事は面白い。殊に平安時代は、京都の方面には、髯のある堂々たる男子が女の眞似をして、弱々しい氣風が漲つてゐた時代であるのに、關東方面の一部に此の氣風のあつた事が面白いのである。



之 由 野 萩

そして、此の氣風が練れに練れて、遂に弱々しい、元氣の無くなつた日本を改造して、氣骨のある新日本を現出した事に思ひ到れば、又頼しい所

がある。今こゝに其の決闘の顛末を語らう。

武藏國に箕田源二源宛といふものがあつた。これはかの有名な武將源頼光の四天王の一人といはれ、また羅城門の鬼を切つ

源頼光

満仲の子

治安元年(六六)

卒

頼光の四天王

渡邊綱

坂田金時

碓井貞道

卜部季武

羅城門

平安京の周圍に

繞らした羅城に

開く南方正面の

門

東寺の西にあつ

た

たと言ひつたへられてゐる渡邊綱の父である。又下總國に村岡五郎平良文といふ者があつた。これも四天王の一人碓井貞道の父である。兩人とも武勇の譽の高かつた人で、共に東國に居る所から互に武勇に於て劣るまいと、常々競争してゐたのであつた。

然るに箕田の家來におしやべりの奴があつて、村岡に向かひ、私の主人はあなたを侮つて、村岡が如何に勇氣があらうとも、逆も自分に手向かひのなることではない。といつてゐます。と告げたから、たまらない。良文の方でも、だまつてはゐない。箕田殿の腕前は此方も知つてゐる。さやうに思はれるなら、然るべき野原をえらんで決闘しませう。と箕田へ申込んだ。かく申込まれては、箕田源二も否應はない。宜しい。承知しました。と、日は何

日、場所はしかくの處とまで約束が成立した。

約束の期日は來た。雙方共に部下の人數五六百人ばかりを從へて、所定の野原へ到着したのが、かれこれ午前十時であつた。

兩陣の間隔は一町ばかり。雙方共に主人のために身を捨て命を惜しまぬ血氣の青年、一列に楯を突きわたして陣所を固めた。かゝる場所には、先づ雙方から兵士を出して決闘開始の申合をなし、其の兵士が各の陣に歸る時に、雙方から矢を射かけるのが例で、その矢の飛ぶ中を、馬をかけさせず、見返りもせず、靜々と我が陣所へ引返すのがえらい事になつてゐる。そして後に兩陣から矢を放つのを射組むといつて、これを開戦の式とするのである。

然るに良文は、此の開戦の始に使を宛につかはして、今日の決闘

雁股の矢
矢尻が二股にな
つてゐる矢



雁股の矢

は、平常するやうに射組むことは面白くない。君と我が輩とが各の手腕を試みるためであるのだから、たゞ二人だけで馬を乗出して、腕のかぎり射ようではないかと申し送つた。宛はいかにも同感でござる。といつて、たゞ一騎陣所を離れて乗出し、雁股の矢を番へて突つ立つた。良文は之を見て大いに喜び、家來どもに對し、貴様たちは見物してゐよ。我が輩が射落されたならば、その時は死骸を取片附けよ。と言ひすてて、これもたゞ一騎雁股を執つて走らせあつた。最初の矢は雙方共に中らなかつた。二度目の矢をば必ず當てようとは互に思つてゐたが、何さま名人と名人との手合はせであるから、良文の放つた矢は、宛が馬を馳せちがへて之を避ける。宛が放つ矢をも、良文はうまく避けて

中てさせない。

股寄
雨覆ひ
腰當
箆の倒れぬやう
に上からしめる
帶

三度目には、今度こそと、互に敵の胸板目がけて放つた。敵は馬から落ちるやうにして矢を避けたから、良文の矢は宛の太刀の股寄の處へ中つたばかりで、からだには些の傷もつかなかつたし、宛の矢も良文の腰當に中つたばかりで、からだには達しなかつた。

こゝに於て、良文は宛に向かひ、お互に、射る矢は決してそれる矢ではござらぬ。最早互の手練の程は見えた。のみならず、此の決闘は意趣意恨といふのでなくて、唯一時の意地張からのことであれば、お互に殺しあふにも及ばぬこととござる。なんと決闘はこれでやめようではござらぬか。といつた。すると宛は早速之に同意して、我が輩とてもさやうでござる。最早お互の手

市原野
古の樺原郷
今の京都府葛野
郡松尾村の地

腕は明白でござる。いざ引返さう。といつて、決闘をやめた。之を見てゐた雙方の兵士は皆大息を吐きつゝ、我が主人たちの馳組んで射合はれる所を見ては、今は射落されるか、今は射落されるかと思ふと、ひやくして氣も心も顛倒し、自分が決闘して生死を賭するよりは却つて恐しかつた。と、胸なでおろして語り合つた。

此の決闘の後、宛と良文とは互に仲善しになつた。以前よりも懇意になつたのである。兩人がかゝる動機から懇意になつたので、其の子の綱も貞道も、共に源頼光に従つてその部下となり、相共に四天王の中に數へられるやうになつたのであらう。頼光が市原野に兇賊鬼童丸を退治した時も、綱と貞道とは共に従つてゐたのである。

青の洞門

また樋田の刎貫
大分縣下毛郡山
國川の上流耶馬
溪にあるくりぬ
き

菊池寛

劇作家・小説家
帝國藝術院會員
明治二十一年
生 高松香川縣高松

了海

この戯曲の主人
公市九郎改了海
はふとした事
の間達から主人中
川三郎兵衛を殺
害して江戸を逐
電ししばらく信
州の木曾に足を
留めたが美濃の
國で發心出家し
て雲水の旅に出
かけ山國谷に於
て旅人救済の爲
青のくりぬきを
作らうとの大願
を起した

要するに此の頃の決闘は實に堂々たるもので、少しも卑怯な眞似をせず、如何にも男らしくやつたものだ。義理を重んじた我が國特有の武士道もこんな所から次第に發達して來たものであらう。(史話と文話)

二一 青の洞門

菊池 寛

處。青の洞門の内部。

情景。舞臺一面刎貫かれたる岩石、舞臺右端が此の洞門の行詰りで、その岩石に面して、了海を初め數人の石工たちが鎚を振つてゐる。焚火がちろ／＼燃えて居る。幕のあく前より鎚の音が聞える。幕があくと、みんな一齊に手を休める。

石工の一 皆が一緒に手を休めると、急に静けさが身に浸みて來る

のう。

石工の二 道理ぢや、地の中へ幾町ともなく来て居るのぢやからのう。

石工の三 今宵は、みんな了海様のお傍に居ぬと、あの晝の武士が、合あは點せずネラに又狙ネラひに来るかも知れぬ

石工の一 そりや、念ねんのない事ぢや。樋田郷まで人をやつて、武士が宿つて居る宿の周圍には、ちやんと寢ずの番を附けてあるのぢや。

石工の二 あゝもう、亥イの刻クだらう。手がしびれるやうに痛むのう。

了海 (しはがれた低い聲で) 尤ぢや。今日は鑿ウツクの燒き方が足りなかつたと見えて、滅相岩メツソウイワが堅かつたのう。あゝもう皆の衆小屋へ引上げさつしやれ。了海も、もう休まう。さあ皆の衆

武士

中川三郎兵衛の
一子實之助
父の仇を報いよ
うとして多年市
九郎を探しまは
つて今日の晝始
めてめぐりあつ
たが多勢の石工
や土地の者にと
められて仇討を
くりぬきの成就
するまで待つこ
とにした

樋田郷

大分縣下毛郡耶
馬溪村

亥の刻

午後十時頃

蔵曲

父實之助

必要時代

了海

了海

引上げさつしやれ。

石工の三 それぢや、みんなお暇をするとしよう。了海様もお休みなされませ。さあ、わしが夜の物を取つて来て進ぜよう。

石工の三、走り去りて、やがて藪クサと汚キき夜具ヨとを持つて来る。程よき所に敷く。

了海 あゝ、忝ハい。忝ハい。それぢや皆の衆、わしが先へ御免蒙るぞ。

(了海寢ようとする)

石工の一 それぢや、了海様又明朝お目に懸りまするぞ。

石工の二 御免なさりませ。

石工の三 御免なさりませ。

了海 遠く去る。了海暫く眠るふりをして、又ひく／＼と起きる。

了海 (合掌して低聲に観音經を誦す) 過去の罪業ツミゴト報ウい来て、實之助様

のおはせられたからは、命は風前の燈ぢや。生ある中に、一寸なりとも、掘進まいでは叶はぬ處ぢや。懈怠を貪る時ではない。

岩面に膝行し、前よりも烈しく打下す。

了海 (聲を勵ましてなほも観音經を誦す。)

狂へるが如く、打進む。暫くすると、實之助が、舞臺の左端から忍び寄つて来る。左に太刀を抜きそばめ、右手を地につきながら、徐々に徐かに忍び寄つて来る。了海は夢にも知らざる如く、更に観音經を誦しつつける。實之助走り寄り、寄らんとして、遑巡す。漸く太刀を振翳して斬りつけんとし、しかも相手の一心不亂なるを見て、打下しがたく、遂に刀を鞘に収めて去らんとす。

了海 (急に振返りて) 實之助様！ 何故お斬り遊ばされぬか。

實之助 (了海に不意に言葉をかけられて、やゝ狼狽して言葉なし。……)

了海 晝間の仕儀は、さぞ御無念にござりましたらう。いざお斬り遊ばしませ。今こそ妨げいたすものは、ござりませぬ。

邪魔の入らぬ中、いざお斬りなさりませ。

實之助

了海とやら、此の上は潔く、此の刳貫成就の折を相待たうぞ。敵を眼前に控へながら、武士たるものが、手を空しうする無念さに、つがへた約束をも反古にいたし、たゞ兩斷にいたさんと忍び寄つたれども、其方が一心精進のけ高さに、瞋恚の炎も打消されて、高德の聖に對し、忍び寄る夜盜の如く、獸の如く窺ひ寄る身があさましうて、太刀を取る手が、心ならずも鈍つたは。此の上は、心長く其の方が本願を達する日を相待たうぞ。

了海 (手を突きて平伏しながら) 極重惡人の拙僧に、大願成就の月日

を貸して下さりますか。忝うござりまする。此の上は、身を粉に碎いて、明日明後日にも刳開く心にて鎚を振ふてござりませう。

了海、實之助に近よりながら、頭を下げる。

實之助

敵同志となるも、宿世の業と申すことぢやが、いかに了海とやら、拙者もたゞ空しく此の地に止つて、其方たちの働くを見るより、及ばずながら、鎚を取つて、一片二片の岩なりとも、削り取つて得させよう。其方が本懐の日は近くなるのは、取りもなほさず拙者が本懐の日は近づくのぢや。

了海

(感激しながら) よい所にお氣が附かれました。貴方様の御助力は百萬の味方よりも頼しうござりまする。貴方様のお顔を見て居れば、この了海奴も片時も鎚が休められませ

縁せらるの因

ぬはい。

實之助

たゞ徒に瞋恚のほむらに心を爛らせて居るよりも、世のため、人のために、鎚を振うて居る方が、此の實之助にも心安いといふものぢや。さらば了海どの、刳貫のあくまでは、味方なれど、

了海

おゝ、一寸でも二寸でも、向かふへ通りましたその節は、たゞ兩斷になさります。其方様の本懐と、了海奴の本懐との成就する日が待遠しうござりまする。

實之助

それ迄は、敵同志が肩を並べて、鎚を振ふも、又一興である。二人相見えて寂しく笑ふ。

時と處。前と同じく洞門の内部。前場より一年餘を経過したる

延享三年
櫻町天皇の御代
(CHECK)

延享三年九月十日の夜。
情景。前場とや、異なり、了海と實之助が、相並んで舞臺の中央に座を占め、互にたゆまず鎚を振つて居る。

實之助 えいつー

了海 おゝつ！

實之助 えいつー！

了海 おゝつ！

實之助 (二寸手を休めて) 石工たちは、はや歸り申したな。

了海 (同じく手を休めて) 石工たちも、今日は終日身を粉にして働

き申した。實之助様そなたももう休まさせられい。もう、九つを廻りましたは。もう御引上げなさりませ。

實之助 なかく。夜の更くると共に、心神澄渡つて、精力は又一

12 2 4 6 8 10 12 24

九つ
十二時頃

倍ぢや。

了海 昨夜も、あのやうにお働きなされたものを、今宵はちと早目にお引上げなさりませ。

實之助 それは、其方にいひたいことぢや、六十に近い御坊よりも先に、わられが引上げてよいものか。(鎚を振上げて又、えいつと打下す。)

了海 おゝつ。(と應じて打つ。)

暫く二人とも打續ける。

了海 (又手を止めて) 昨日石工の一人が鎚の合間に、かすかな鳥銃の音を耳にしたと申して居つたが、御身様はお耳になされたか。

實之助 身どもは、鳥銃の音は耳にせねども、一昨日の晩であつた

助動詞
動詞
来らぬ
更

退陣

破産して他へ
引き移る事
の備を信する
の外へんも
うする事

何ハ天を叩

實之助

か、微かに瀨鳴の音を聞いたやうに覺ゆれども、それも鎚を
持つ手を休めてふとまどろんだ折の夢かも知れぬのぢや。
御身様が來られてからも、もう一年に近い。あゝ待遠しい
事でござる。まして此の一月二月了海の身も心も漸く衰
へ果てまして、力も十が一も出ぬ様に成り申した。今日明
日と頼まれぬ命の様に覺えます。萬が一、鎚を持ちなが
ら、息が絶え果てるなどの事がありましたら、身の無念はと
もかく、御身様に申譯の立たぬことと、精神を勵ましては居
りますれども、あゝ今ははや了海が辛抱の綱も切れ申した。
あゝ、岩よ。岩よ此の一念に微塵となれ。(烈しく打下す。)
たゞ不退轉の勇氣ぢや。此の期に及んで退轉なされば、
九仞の功も一簣にかくるのぢや。心を確にお持ちなされ

おんをのり
にまをり
する事

了海

い。今となつては、たゞ精進の外はござらぬ。えゝつ！
(烈しく打下す。)
いかに、御身様の仰の通りや。一下の鎚にも、懈怠疑惑の
心があつてはならぬは。念彼觀音力！ おゝつ。
と打下す。
二人相並んで烈しく打下す。
了海 あゝつ。(と鎚を捨てて、右手を左手にて握る。)
實之助 (駈寄つて) 如何なされた。如何なされた。
了海 思ひの外に脆い岩で、力が餘つて拳までが貫き申した。(ふ
と了海岩面に開かれた穴に氣が附く) 御覽なされい。不思議な
穴が開き申したぞ。
實之助 (穴の所に近づきながら) 不思議ぢや、風が通ふは。

9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

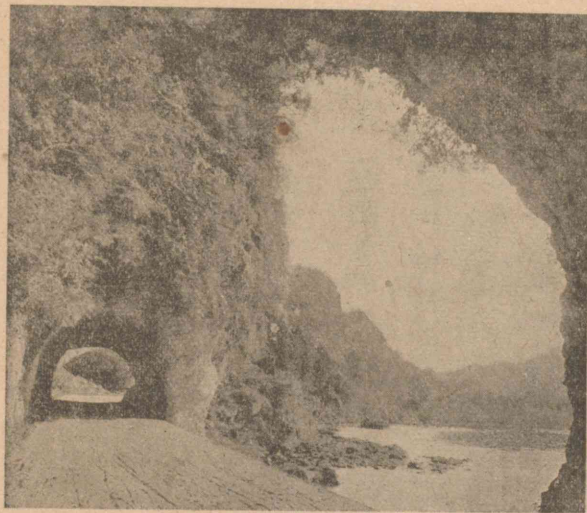
了海 (狂氣の如く) なに、なに、風が通ふとは。 (錘を振上げて烈しく打續く。岩それに従つて崩れて洞になる) 崩れる。快く崩れる。

實之助

(了海と並んで、狂氣の如く錘を振ふ) 貫けるは。快く貫けるぞ。

了海

あゝ風が通ふ。風が通ふ。さては刃貫き了せたのか。實之助様、とくと御覽なされい。



青の洞門

實之助

(半身を穴から突きだしながら) あゝ正しく大願成就なるぞ。

山國川
源を英彦山に發
して耶馬溪をす
ぎ中津で海に注
ぐ

了海

ほのかに光が見えますは。闇の中に、かすかに光るは山國川の流に相違ない。了海どの、正しく大願成就なるぞ。(うめくが如く、言葉を發し得ず、たゞ手を合はせて身を悶える……)

實之助

見える！ 見える！ 聞える！ 聞える！ 川の流が、聞えるぞ。眼の下に、闇にもほのじろく見える。まぎれもない街道ぢや。了海どの、お喜びなされい。

了海

(始めて聲を擧げて哄笑す) あな嬉しや。天上界へ、生きながら昇る心持がする。眼も耳も衰へて、川の流も聞えねど、ほの明りは見えますするぞ。あな嬉しや。嬉しや、く、く。心の中が、煮えくり返るやうに嬉しい。(了海身悶えをする)

實之助

(了海の手を執りながら) 尤ぢや。尤ぢや。たつた一年手傳うた此の身にも此の嬉しさ、まして二十餘年の艱難辛苦、佛

神も納受ましまして、今宵本懐を遂げらるゝ御坊の御心中。實之助も嬉しうござるは。

了海 (ふと考へ附いて) 身の嬉しさに取りまぎれて申し後れました。今宵こそお約束の日ぢや。いざお斬りなされませ。了海 奴もかゝる法悦の中に往生いたすなれば、未來は淨土に生まるゝこと、必定疑なしぢや。いざお斬りなされい。

實之助 (了海の突いた手を執りながら) 了海どの、もはや何事も忘れ申した。二十年來肝を碎き身を粉にする御坊の大業に比べては、敵を討つ討たぬなどは、あさましい人間の世の業だ。實之助も御坊の傍に一年の修業を積んだ仕合はせに、修羅の妄執を見事に解脱いたしたは。見られい、月が雲を破つたと見え、光がさして來た。

心まよひ
を世俗の
をるるり
解脫
妄執

了海 (穴より顔を出しながら) おゝ嬉しや。嬉しや、老眼にも山國川の流がほのかに見え申すは。

實之助 此の月の光が、御坊には即身成佛の御光のやうに輝き申すは。此の實之助に取つても、妄執を露らす眞如の光ぢや。あゝ、快い月影ぢや。御坊を討つ代りに、此の岩をかう打たうぞ。(傍なる長き柄の鎚を取り、力任せに打つ。岩石崩れ落ちて山國川一帯の山河の夜の姿が見える。)

了海 げに快い月影ぢやのう。(又心附いて) いざ實之助様、お斬りなされませ。明日となれば、石工どもがまた妨を致さうも知れぬ。いざお斬りなされい。

實之助 (近よる了海の手を執つて) 何をたはけた事を申さるゝ。あれ見られい！ 柿坂あたりの峯々まで、月の光に浮かんで

る、現世に
け得るは
佛と云ふ
即ち此の
を打つ本
來の佛を
業親も
増え得道
す。予

柿坂
青の洞門の南十
二軒
山國川の上流
耶馬溪鐵道の終
點で新耶馬溪の
入口

見えるは。大願成就、思ひ残す方もない月影ぢや。

二人手を執つて、月の光に見惚れる。

了海 (やがて念珠を取出して揉みながら) 南無頓生菩提! 俗名中

川三郎兵衛様。了海奴が悪逆を赦させ給へ。(泣きながら

頭を下げる。)

實之助

恩讐は昔の夢ぢや。手を舉げられい。本懐の今宵をば、

心の底より喜び申さう。あな嬉しや。嬉しや。喜ばしや。

二人相擁して泣くところにて幕。

(菊池寛戯曲集)

正岡子規

名は常規

俳人

歌人

伊豫國(愛媛縣)

松山生

明治三十五年歿

年三十六

三 故郷

正岡子規

世に故郷ほどこひしきものはあらじ。花にも月にも喜にも悲

自然的

しみにもまづ思ひ出でらるゝは故郷なり。故郷は學問を究め、見聞を廣くする地にはあらず。されど故郷へは歸りたし。故郷は事業を興し、富貴を得る地にはあらず。されど故郷には住



正岡子規

みたし。兩親姉妹あるがために故郷に歸りたしと思ふものもあらん。我は親同胞ともに故郷にあらねど、なほ故郷こそこひしけれ。都にありて世を厭ふがために我はさまでに世を厭ふ思へば十餘年の昔はや

三二 故郷

一五二

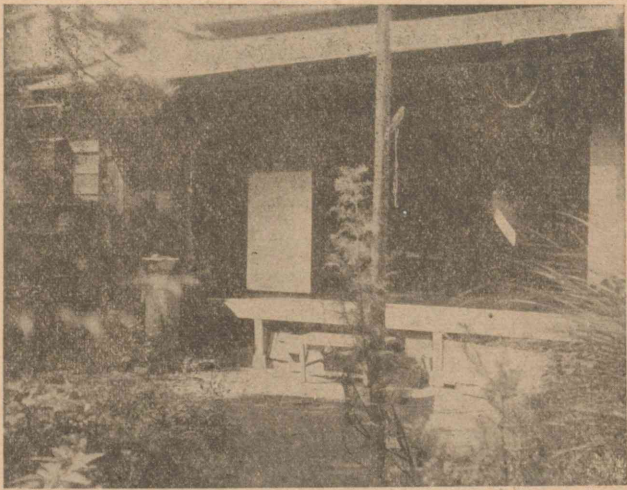
城

伊豫の松山城

首のなり
勝の城
伊豫の松山城

り氣の抑へ難くて、單身故郷を出でゆかんとこそは勇みしか、い
 ざ首途といふ際に一點の熱涙は覺えず頬のあたりに流れ來る
 を、見送の人にツキマシヒ見せじと顔背けたる時の苦しさ、何やらちんちん胸につ
 かへたる心地なりき。母親の乳と故郷の土とは離れうきもの
 なり。
 故郷近くなれば、城の天主閣こそ先づ目をよろこばす種なれ。
 低き家、狭き町、寂しき繩手、丈高き稻の穂、鼻の先に並びたる連山、
 をさなき頃より見慣れたる一軒家、見るもの皆莞爾として我を
 迎ふるが如く、何れ懐かしからぬはなし。まづ身よりの家を此
 處彼處と音づれて久濶の情を敍ぶれば、年老いたる婆々様、瘦せ
 たる叔父御、肥えたる叔母御、よく居眠する下女の顔さへ見覺え
 たるまゝに少しも變らず。さて變らぬは、故郷よと思ふも歸り

着きし瞬間なり。



きあひ、わが前に跪きて禮を敍ぶるもあれば、襖の隙より恥づか

變らぬはめでたけれど、全く變
 らでは何の面白き事かあらん。
 變らずと見るうちに、いさゝか
 子ながらかれもこれも變り行き
 たるこそなか／＼に聞きて、見
 規てゆかしけれ。人の上につき
 庵て第一に變りたるは、わが従弟
 妹のいたくも成長したること
 なり。「都の人こそ來たまへれ。
 われも其の顔見ん。」などひしめ

新井白石

名は君美
國漢學に深く外
國の事情にも通
じて居た
徳川家宣に用ひ
られて政治に參
與した
享保十年(元吉)
卒
年六十九
贈正四位
寛永寺
上野の東叡山寛
永寺

二三 おもひで

新井白石

我が幼きころに、上野物語といふ草紙ありけり。これは寛永寺の花見に人のむれ來ることども記ししなり。我が三歳なりし春のころにやあるべき、火燧に足をさしてはらばひ居て、その草紙を見ながら、筆紙を求めてすき寫しけるを、母にておはせし人の見給ひ、十が中一二は、まことの文字もあるを、我が父に見せ參らせしを、父の友なる人の來り見しより、人々も聞傳へてその寫せるものどもを取傳ふる事になりたり。我が十六七歳の時上總國に往きしに、かしこにて、その寫せるものを見る事を得たりき。又其の頃屏風に我が名を題せしに、二字はその體をなしたるもの、の後までありしが、火に焼けうせたりければ、今はその節

上總國

君津郡久留里町
土屋氏の領地
木更津の東南十
二軒

往來物

庭訓往來消息往
來などの類
戸部
土屋民部少輔利
直
上總國久留里藩
主
白石の父の主君
富田
始め小右衛門後
に覺信といつた
人
太平記評判
五十卷
和田助則著
太平記にある戰
争についてその
兵法戰略などを
批評論難した書
上松
忠兵衛といつた
人
連歌や書に巧で
あつた

のものは我がもとには残らず。此の後は常の戲に、筆取りて物書くことのみ教へければ、おのづから日々に文字を見知りたれど、物讀む師などすべき人無かりしかば、只往來物の類などを讀みならふのみなりき。

戸部の家人に富田とて生國は加賀の人と聞えしが、太平記評判といふ書を傳へて、其の事を講ずるあり。夜々に我が父など寄合ひつゝ、其の事を講ぜしめらる。我が四五歳の時に、常にその座に侍りてこれを聽くに、夜いたく更けぬれど、終に座を去りし事もなく、講畢りぬれば、其の義を請ひ問ふ事などありしを、人々奇特の事なりといひき。
六歳の夏の頃、上松といひし人の、少しく文字などありしが、七言絶句の詩一首をしへて、其の意を説き聞かせしに、やがて誦をな

しければ、三首まで教へられしをば、人にも講じ聞かせたりき。
「此の兒文才あり、いかにも師を選びてまなばしめらるべし。」など、

庭訓往来

春始津悦向貴方先祝儀
留貴萬福猶以幸甚
初御餅者以朝日元三之次可急
中之處致馳信人之子日遊



庭訓往来と新井白石

彼の人もいひしかど、かたくななる昔人たちのいひしは、昔より傳へし事あり。利根氣根黄金の三こんなくしては、學匠にはなりがたしといふなり。此の兒利根こそ生まれつきたため、猶いとけなくしてその氣根のことも測りがたく、家富めりとも見えねば、黄金の事心得られず。な

どいひあへりしに、我が父も、戸部の御いつくしみによりて、常に傍を離れ参らせず、學に入れ師に従はしめん事も叶ふべからず。されど幼きより物書く事をば、戸部も人々に語り誇らせ給ひし事なれば、せめて物をば書き習はしめたくこそ侍れ。とて、我が八歳の秋、戸部の上總國に往き給ひし後にて、手習ふ事を教へしめらる。其の冬の十二月半ば、戸部歸り参り給ひしかば、つねに傍にさぶらふ事もとの如し。

明けの年の秋また國に往き給ひし後にて、課を立てられて、日の中に、行草の字三千、夜に入りて一千字を限りて書出すべしと命ぜられたり。冬に至りぬれば、日短くなりて、課はまだ満たざるに、日暮れんとすること度々にて、西向なる竹縁のある上に机を持ちいでて、書きをへぬる事もありき。また夜に入りて手習

庭訓往來

一卷
僧玄慧著

ふに睡の催して堪へがたきに、我に附けられしものと、竊にはかりて、水二桶づつかの竹縁に汲置かせて、いたく睡の催しぬれば、衣脱ぎすてて、まづ一桶の水をかゝりて、衣うち着て習ふに、始め冷やかなるに目覺むる心地すれど、しばし經ぬれば、身温かになりて、またく睡くなりぬれば、又水をかゝること前の如くす。二たび水をかゝりぬる程には、大やうは課をも満てたりき。これは九歳の秋冬の間の事なり。

かゝりし程に、此の頃よりは我が父の人に贈り給ふ文をば形の如くには書きたり。十一歳の秋、また課を立てられて庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて、十日のうちに淨寫して參らすべしと命ぜられ、命ぜられし如くに事を終へしかば、冊になして戸部に見せ參らす。賞め候ふこと大方ならず。十三の時より

筆蹟

御手書被_レ下_レ辱、拜見仕候。如_レ仰、雨濕之節、彌御堅固被_レ成_レ御座、珍重奉_レ存候。沙而先日御枉臨爲_レ御禮、昨日參拜之儀被_レ仰下_レ重疊過當之至辱次第奉_レ存候。猶其内以_レ拜謝、可_レ申上_レ候。以上

四月廿五日
新井筑後守
豆州様

新井白石筆 (簡手家名)

三州様
新井筑後守

は戸部の人と贈答し給ふ程の文ども大方は我に命ぜられき。又十一歳の時に我が父の友に關といひし人の子どもは、太刀打の技に勝れて人に教ふる事ありしを、我にも此の技教へられんことを望みしに、わぬしいまだ幼し、これらのわざ學ばんことなほ早かりといふ。「さこそ侍るべけれど、太刀つかふこと少しも心得ざらんには、刀脇差腰にせんこと、誠に不用の事

十六になりし者
神戸といふ人の
二男であつた

若侍

長谷川といふも

翁問答

二卷

中江藤樹の著
歴史文學其の他

者と問答した體
に書集めたもの

京の人

江島益庵

小學

六卷

宋の朱熹撰

内篇外篇に分け

儒教の道を平易

に説き且古人の

言行を録した修

身書

にや」といひしかば、のたまふ所誠に然なり。とて、一つの技を傳へて習はしめたり。かゝりし程に、其の年十六になりし者の、我と藝を試みんといひしかば、木刀を取りて三度拵ひて三度まで勝つことを得たりしにぞ、人々も亦興に入りて笑ひたりける。その後は、つねにかゝる武術の事どもを好みて手習ふ事など心にも染めずありしかど、物讀む事をば好みければ、常に我が國の物語草紙等の類をば見ずといふものもなかりき。十七歳の時に至りて、同じやうに召使はるゝ若侍の許に往きしに、案の上に書あるを見れば、翁問答と題せしものなり。いかなる事をや記しぬらんと思ひて、借ることを得て家に携へ歸りて見けるにこそ、始めて聖人の道といふものある事をば知りけれ。これより道に志切なりけれど、師とすべき人もあらず。京の人

程子

宋の程明道

四書

大學

中庸

論語

孟子

五經

詩經

書經

易經

禮記

春秋

韻會

三十卷

元の熊忠撰

漢字の韻により

て排列し字句を

注せる韻書

字彙

十四卷

明の梅膺撰

漢字の畫引の字

室鳩巢

名は直清

徳川幕府の儒官

享保十九年(三元

巳卒

年七十七

贈正四位

にて醫を業とし、少しく學問あるが、戸部の許に日々來れるあり。此の人に向かひて志の程を語りしに、小學の題辭を講じ聽かせられたり。その後又程子の四箴をも講じ聽かせられしより、やがて小學の書を日夜に誦し習ひて、業已に畢りぬれば四書を誦し習ひ、その後又五經をも誦し習ひたれど、これらは皆々句讀を授けし師あるにもあらず、自ら韻會字彙等の書によりて誦し習ひければ、後に思ふに、ひがごとのみぞ多かりける。

(新井白石全集 折たく柴の記)

二四 立志

室 鳩巢

諸君の如きは、春秋に富み、材力に足る。若し懈らずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。然れども歲月は恃むに足

古詩

文選に出て居る
作者未詳の漢代
の詩

陶淵明

名は潛
晉の隱逸

らず材力は多とするに足らず、たゞ孳々汲々として勉めて息ま
ざるにありぬべし。もし悠々として日を涉りなば、年老い齡傾
きて後、日頃の懈を思ひ出でていかに悔ゆとも、何の益かあるべ
き。即ち今、余が身の上にて候。されば古詩にも、
少壯不努力、老大徒傷悲。
といひ、陶淵明も、
盛年不重來、一日難再晨。及時當勉勵、歲月不待人。
といへば、古人も此の感懷を同じうすとぞ見ゆる。此等の詩句、
時々吟詠して勇進の氣を振ひ起すべし。又世に傳ふる朱文公
の勸學の文に、

勿謂今日不學而有來日。勿謂今年不學而有來年。日月逝矣、
歲不我延。嗚呼老矣、是誰之愆。

朱文公
朱熹
宋の儒學者

陶侃

晉の政治家
陶淵明の曾祖父

筆蹟

八月十三日之貴
翰、九月四日に
至、而到來、拜見
仕候。何方に淹
滯仕候哉。南部
兄より之副書も
同日に而御座
候。先以尊履御
清勝旨欣躍不
過之奉存候。
今以公務殷繁
不、被取言暇、
候由、御賢勞之
段奉候。先頃
進呈仕候軍器考
序相達、御感勲之
御謝詞、恐入奉
存候。去共願應
賢意、候旨被仰
下、多幸之至に

言簡にして意も明白なり。折節打誦じて自ら警むべし。
それよりも余が常に愛するは陶侃が語なり。

八月十三日之貴翰、九月四日に至、而到來、拜見仕候。何方に淹滯仕候哉。南部兄より之副書も同日に而御座候。先以尊履御清勝旨欣躍不過之奉存候。今以公務殷繁不、被取言暇、候由、御賢勞之段奉候。先頃進呈仕候軍器考序相達、御感勲之御謝詞、恐入奉存候。去共願應賢意、候旨被仰下、多幸之至に

室鳩巢集筆

大禹聖人、乃惜寸陰。至於
於衆人、當惜分陰。豈可
佚遊荒廢、生無益於時、死
無聞於後。是自棄也。
といへるこそ學者志を立
つる法とすべきなれ。前
にいへる淵明が詩も曩祖
以來の家法にこそと思は
る。凡そ人と生まれて學
に志ありといふきは、の、生

奉^レ存候。同文通
考序之儀蒙^レ仰
委細御書體被^レ
仰下。且又別幅
に目録題注被^レ
記^レ之候被^レ入^レ
御念^レ候儀と奉^レ
存候。野圖技窮
可^レ申候。共先
如何様共構思仕
候而追而可^レ受^レ
御指教一候。

九月十八日
室新介
(花押)
新井勘解由様
座前

子^レ原國文通考序之儀蒙^レ仰
委細御書體被^レ仰下。且又別幅
に目録題注被^レ記^レ之候被^レ入^レ
御念^レ候儀と奉^レ存候。野圖技窮
可^レ申候。共先如何様共構思仕
候而追而可^レ受^レ御指教一候。

(簡手家名)

きて時に益なく、死して後
に聞ゆることなく、草木と
同じく朽ちはてんは、いと
口惜しかるべきことなり。
されば諸君もこの陶侃が
語をもて自ら激勵して日
夜勤勉せらるべし。

但し學は勇進を喜ぶとい
へども又急迫なるを嫌ふ
とかく一生こゝを離れぬ
に聖賢の書に優游涵泳しなば、久しうして自ら進益あるべし。

九月十八日
室新介
新井勘解由様
座前

ことなれば、急迫にして求むべきにあらず。たゞ懈を戒めて常

紹鷗

武野仲村
和泉國(大阪府)
堺生
織田信長の茶道
の師
弘治元年(三三三)
利休
千宗易
和泉國(大阪府)
堺生
紹鷗の門人
豊臣太閤の茶道
の師
天正十九年(三三三)
年七十一
オリソニック
オリソニック競技
往古ギリシャで
四年毎にオリソ
ニック大祭を行ひ
五日間大競技を
行つた
これが今のオリ
ソニック大會の
起源である
山川建
男爵
明治二十五年(二
五)東京生

余昔加賀にありし時、士族の中に紹鷗利休が風流を慕ひて茶の湯を好む者あり。江戸に行役するとき道中茶具を持して、逆旅にても釜をかけ炭をおきて楽しみとしけるを、同行の人見て、いかにすけばとて道中にてはやめよかし。といへば、その人いふは、「道中として一生の外にあらばこそ、これも一生の日數の内なればわが茶の湯をする日にあらずといふことなし。家にあると何ぞ異ならん」としてその後もやめざりき。學者の道に志すも此の人の茶の湯を好むが如くなるべし。(駿臺雜話)

二五 オリンピック 山川 建

現在の國際オリンピック大會は、古代ギリシャで行はれたオリソニック祭を一千八百九十四年に佛蘭西の教育家クーベルタ

クレーベルタン男爵

佛蘭西の體育家
現代オリンピック
の創始者

(西曆一八三一年
七月)

五種競技

古代オリンピック

クでは高跳・槍

投・圓盤投・競

走・角技

今のオリンピック

クでは走幅跳・

槍投・二百米競

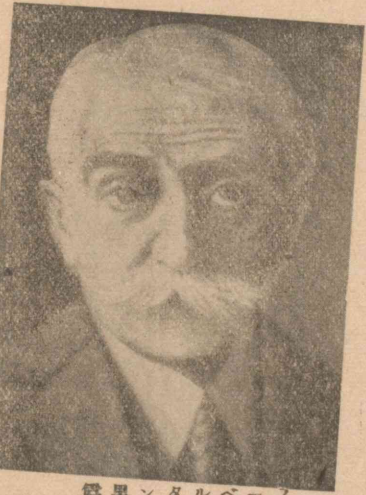
走・圓盤投・千

五百米競走

レスリング

相撲に似た競技

ン男爵が再興したものであるから、これを現代オリンピックといひ、古代のを古代オリンピックと稱へてゐる。



爵男ンタルベール

古代オリンピックは、ギリシャの主神ゼウスの神靈を慰めるために毎四年に一回神前の庭でオリンピック祭を催し、専ら競走・五種競技・拳闘・レスリング等の如きスポーツを行つたのであるが、尙その外に音楽・美術・辯論などの競争も行はれた。

この大祭は大抵夏季に行はれたもので、祭典の行はれる一箇月の間は、ギリシャ全土に互つて、一切の争鬪を禁止して、絶対の平和が保たれるやうになつてゐたのである。當時のギリシャは

小國が分立し、互に國力の擴張に餘念なく、常に小競合や戦争が絶えなかつた。そこで四年に一回は一定の期間だけでも争鬪を止め、平和の氣分を得たいといふことから、オリンピック大祭が行はれたとも謂はれてゐる。

ともかく、オリンピック大祭にはギリシャ全土から、各國それぞれ代表的の選手を出して、盛に競技を行ひ、その期間は全ギリシヤに平和の氣分が漲つてゐた。この時若し争鬪を敢へてするものがあれば、神慮に逆ふものとして、厳しい制裁を受けたことは、事實である。スポーツによる争は行はれたが、國家間若しくは個人間の争議は絶対に禁止されたといふのは一種の心理的妙味を含んでゐる。又競技に對する態度は極めて眞面目で、選手に選ばれる者は、競技の達人であると同時に、品性や人格も立

フェアプレー
正々堂々たる勝
負

派でなければならず、又體格も強健壯美であつて、謂はば總べての點に於て代表的青年であつた。又競技の行ひ方は頗る眞劍で、體力の盡きるまで、氣力の果てるまで、熱心に争つたもので、闘などでは、死に到るまで戦つた者もあつた。何しろ今日の如く競技のやり方が科學的に考へられたものでもなく、又人情は自ら殺伐であつたから、行く所まで行くやうな烈しい競争が行はれたのである。しかし當時に於ても卑怯な振舞や陋劣な手段は堅く戒められ、謂はゆる正々堂々の陣を布いて、全力を傾けて相競ふといふフェアプレーの精神は十



(作ンロミ) 投盤圖

オリレブ
橄欖
オリレブの葉で
作つた冠
アマチュア
素人



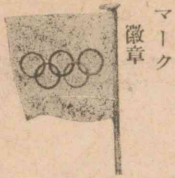
分に發揮されてゐた。かやうな譯であるから、競技に優勝した者は、絶大の名譽を負ふは勿論、その名聲はギリシヤ全土に響き渡るのである。しかしこれを表彰する方法は極めて精神的で、神前に植ゑてあるオリレブの葉で作つた冠が授けられるに過ぎなかつた。決して物質的の褒賞を授けることはない。こゝにも今日のアマチュアスポーツの精神が輝いてゐたのである。かく古代オリンピックは、神に捧げる神聖な祭典として、ギリシヤ民族の平和的施設として、純眞なるスポーツ精神の發揚として、はた堅實なる心身鍛錬の試練として、誠に意義深きものであつたことはいふまでもない。しかしその後ローマ時代に入ると、ローマ人の功利的の氣分か

ゲームス
諸種の競技

らスポーツを何とか社會上に利益的に役立つものにしようと考え、遂に見せ物にして、これを觀て楽しむといふ風になり、隨つてスポーツの職業化興業化が盛に行はれ、外觀的には盛大を極めたが、眞のスポーツ精神は腐敗し、純眞なる青年の心身鍛錬の美風は地に墮ちてしまつた。その結果はいふまでもなくスポーツを廢滅に導き、又オリンピックゲームスも中止の已むなきに至つたのである。この消息は吾々に一つの大きな暗示を與へる。それは即ち、スポーツの發達は決してローマの職業化まで導いてはならぬといふことである、どこまでもギリシャの純眞なるアマチュアスポーツの限度を超えてはならぬといふことである。何事にも氣の早い日本人は、アマチュアスポーツが完全に建設されないうちに、はや既にスポーツ職業化の弊風を

醸しつゝあるのである。大いに戒むべきことと思ふ。

現代のオリンピックは、前にも述べたやうに、一千八百九十四年に再興されたのであるが、その精神はギリシャ時代のオリンピック精神に準じたことは言ふまでもない。又毎四年に一回行はれることも同様である。即ちアマチュアスポーツの確立とフェアプレーに依る競技の普及と、そして純眞なるスポーツメンシップを通しての國際親善とが大眼目となつてゐるのである。現にオリンピックのマークとされてゐる五つの輪の連鎖は、よくこの精神を表象してゐるのであつて、五つの輪は世界の五大洲を象り、五大洲に在る各國民が仲よく手を聯ねて行くべきことを示してゐる。又五つの輪にはいろ／＼色がついてゐて、亞細亞は黄、亞米利加は青、歐羅巴は綠、オーストラリヤは紅、ア

マーク
徽章

フリカは黒といふ意味だと謂はれてゐる。しかも一つくの
圓輪は、明朝快活、純真無垢にして、スポーツの精神に相通ずると
ころがあるのである。(學士會月報)

辰野保

辯護士

大日本體育協會

理事

昭和十五年歿

年五十

チーム

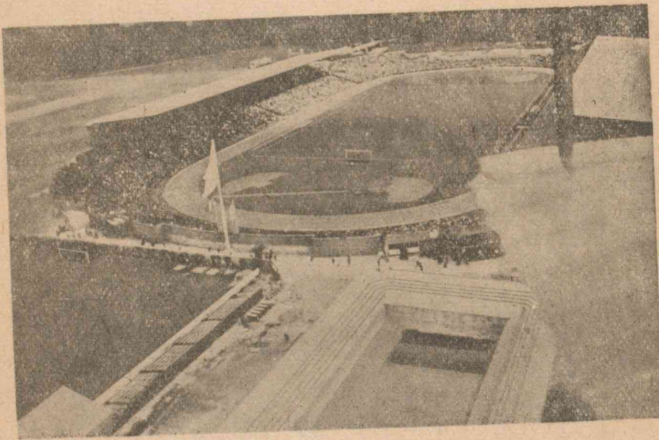
組

團體

二六 スポーツマンシップ 辰野保

レスリングの日本選手として巴里の大會に出場した内藤克俊
君は、アメリカの學生チームの優勝者でありました。かれは、
アメリカの選手と共に佛蘭西に渡つて來ました。その船には、
無論アメリカレスリング俱樂部の優勝者である、かのリード選
手も同船してゐました。船中の朝な夕な、二人の交情は次第に
深くなりました。船中でも、内藤選手の左の人差指の怪我につ
いて、リード君は人一倍心配もし介抱もしてくれました。やが

オリンピック村
オリンピック大
會に出場する選
手の宿舎を特に
或場所へまとめ
て作つた所

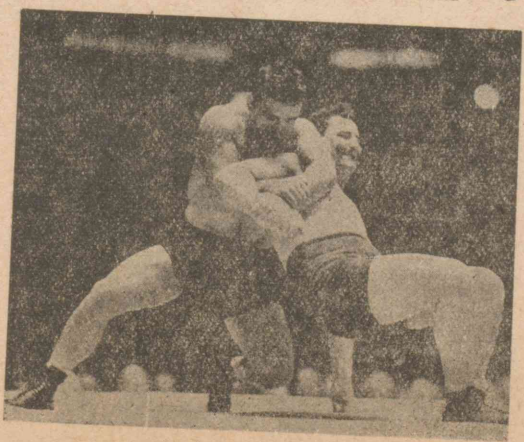


巴里のオリンピック大會

て巴里の大會に出ると、二人は豫想の如く連勝して、とう／＼準
決勝戦に於て相見ゆることになつ
たのであります。試合は最初から
火花を散らして闘ひ、互に祕術を盡
くした末、正規の十分間にあと二分
といふ時に、内藤君は惜しくも敗れ
てしまひました。
その夜の事です、リード選手はオリ
ンピック村の日本選手合宿所を一
人でたづねて來ました。内藤君の
手を握つて、實に今日は辛かつた。
君の左手の負傷を自分はよく知つてゐる。今度のゲームの最

ハンディキャップ
競技などで優者に物を負はせたり後れて出發させたりして競技者の優劣を平均させること

初から僕は君と相會ふ日を苦に病んでゐた。君には大きなハンディキャップがあるのだ。自分は今日辛うじて君に勝つことを得たものの、心の中では親友のために絶えず泣いてゐた。この上は、僕は最後まで立派に戦つて、選手権をきつと自分の手に得よう。そして僕は自己の第一人者となることによつて、一方、米國のレスリングの名譽を輝かすと共に、又他方、君の等位を上ぐることに努力する」と、聲涙共に下る有様であつたといふ。アメリカにもこんなに優しい、いゝ選手がゐます。



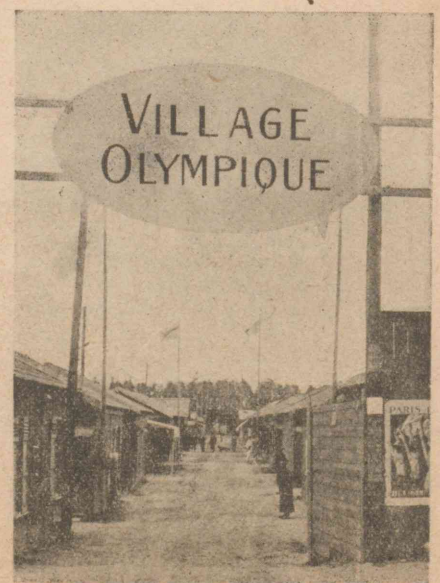
技競ゲンリスレ

日・華・比
日本・中華民國・比律賓

マラソンレース
長距離競走
現在のオリンピックでは二十六哩四分の一即ち約四三・四五軒を走ることになつてゐる
スタート
出發
スタートを切る
とは出發すること

大正十二年五月、日華比三國の極東選手權競技大會が大阪で開かれました。

日本軍の勢物凄く、既に優勝は確實でありましたが、最後の日に愈、呼物の二十六哩マラソンレースが行はれました。この競技に参加した一人に、岡山縣の



村クッピンリオ

長谷川照治といふ青年があつたのです。この日は雨上りの、實に蒸暑い日でありました。正午競技場にスタートを切つてから、長谷川君は、地方青年に見る一本氣の眞面目さで、常に先頭を

コース
道程
スタジアム
競技場

きつて二十六哩の長いコースを見事に走破しました。萬雷の如き歡呼の中に、今やスタジアムに歸つて來ました。

しかし不幸にして、この勇者は、その時殆どその精力を消耗し盡くして、どうやら視力さへも失つたかのやうでありました。その中にかれば競技場の半ばごろまで來ますと、俄に氣を失つてその場に打倒れてしまひました。折角こゝまで先頭を



發出のソーレンソラマ

切つて來たものと、場を埋めた何萬の觀衆は、あと三百米ばかりに迫つた決勝點まで、何とかして走らせようとして、狂氣の如

野口源三郎

體育家
東京高等師範學
校教授

く、或はその名を呼び、或は激勵して柵外より聲援はしましたが、國際競技規則で競技者の身體に觸れることは絶対に禁じられてゐる以上、倒れ臥した長谷川君を再び起して走らせる方法は、到底見出すすべもなかつたのであります。丁度その時です、役員の一、野口源三郎君は、大急ぎで一本の日の丸の小旗を取來り、これを柵の中から倒れた長谷川君の眼の前に持つて行つて、「長谷川君、日本の爲にやつてくれ」と言ひながら一振り振つたのでした。すると、今まで全く生氣を失つてゐた長谷川選手は、すつくと起上つた。そして野口君が日の丸の旗で指さす方にとぼとぼと走り出したではありませんか。見物は、この悲壯な光景を見て、ほんとに泣きました。彼は又倒れた。再び日の丸の旗は振られた。彼は又起上つた。そして三度倒れて四度目に

起上つて、彼は遂に決勝點に入つたのであります。何萬の觀衆は感に打たれて、この光景を正視する者はありませんでした。我々は、この日こゝに眞の日本を見たのです。 (スポーツ隨筆)

二七 氷川清話

勝海舟

世に處するには、どんな難事に出會つても臆してはいけぬ。「さあ、何でも來い。おれの體がねぢれるなら、ねぢつて見よ」といふ料簡でいくがよい。さうすれば、難事が到來すればするほど面白みがついて來て、物事は造作もなく落着してしまふものだ。何でも大膽にかゝらなければいかぬ。どうせうか、かうせうかと躊躇するやうになつてはもういかぬ。若し一度で出來なければ何度でも出來る所までやり通す。とかく世間の人は、事業

氷川

東京市赤坂區氷川町氷川神社の傍に勝伯の邸があつた

勝海舟

名は安芳

政治家

舊幕臣

海軍卿

樞密顧問官

伯爵

明治三十二年(一九一九)卒

年七十七



勝海舟

の成就する前に、はや根氣が盡きて疲れてしまふから、大事が出來ぬのだ。確乎たる方針を立て、決然たる自信によつて知己を千載の下に求むる覺悟で進んで行けば、何時しか我が赤心の貫徹する時機が來て、これまで敵視して居た人の中にも互に肝膽を吐露しあふほどの知己が出來るものだ。區々たる世間の毀譽褒貶を氣にするやうでは到底仕方がない。そこに

行くと、西郷南洲などはどれ程大きかつたか分らぬ。高輪の一談判で自分の意見を容れたばかりでなく、江戸全市鎮撫の大任

西郷南洲

名は隆盛

明治維新の元勳

参議

陸軍大將

明治十年(一八七九)

戦死

年五十二

贈正三位

筆蹟

戊辰三月官軍先鋒至品川二十五日を期して侵撃の令ありと。同十四日書を先鋒參謀に送り一見を希ふ。余高輪薩摩の邸に到る。

まで一切自分に任せて少しも疑はぬ。昨日まで敵味方であつたといふことは何處へか忘れてしまつたやうだ。其の度胸の大きいことには自分もほとく感心した。

戊辰三月官軍先鋒至品川二十五日を期して侵撃の令ありと。同十四日書を先鋒參謀に送り一見を希ふ。余高輪薩摩の邸に到る。

(帖友亡)筆舟海勝

官軍が品川まで押寄せて来て、いまにも江戸城へ攻入らうとする際に、西郷は自分が出した唯一本の手紙で、芝田町の薩摩屋敷までその談判にやつて來た。當日、自分は羽織袴で馬に騎つて、從者を一人連れたのみで出掛けた。まづ一室へ案内されて暫

筆蹟

尊翰拜誦仕候。陳ば唯今田町迄御來駕被下候段爲御知候被下早速罷出候儀可仕候間何卒御待居被下度此旨御受迄如レ此御座候。頓首
三月十四日
西郷吉之助
安房守様
拜復

号細相續を信
望々回丁品川未だ
ふらふら能力の知
あはれをり候仕候
何卒御待居被下
度此旨御受迄
如レ此御座候。頓
首
三月十四日
西郷吉之助
安房守様
拜復

西郷南洲書(帖友亡)

く待つて居ると、西郷は庭の方から、古洋服に薩摩風の下駄をはいて、例の熊次郎といふ忠僕を従へ、平氣な顔で出て來た。「これは遅刻しまして誠に失禮」と挨拶をしながら座敷に通つた。其の様子はすこしも一大事を眼前に控へたものとは思はれなかつた。さて愈、談判になると、西郷は自分のいふことを一々信用してくれ、其の間に一點の疑念をも挟まない。「色

桐野

桐野利秋
鹿兒島の人
西南役の勇將
明治十年(一八七九)
城山に戦死した
年四十
贈正五位

色むづかしい議論もありませうが、私が一身にかけて御引受します。とかういふのだ。西郷のこの一言で、江戸百萬の生靈もその生命と財産とを保つことが出来、徳川氏も亦その社稷を保つことを得たのだ。若しこれが他人であつたら、いや、貴様のいふ事は自家撞着だ。とか、言行不一致だ。とか、澤山の暴徒がああ通り處々に屯集して居るのに、恭順の實が何處にある。とか色々喧しく責立てるに違ない。さうなると談判は忽ち破裂だ。併し西郷は流石にそんな野暮はいはない。よく大局を達観する明と大事に處する斷とをもつてゐた。

談判がまだ始らないうちから、桐野などといふ豪傑連は、大勢次の間へ来て竊に様子を覗つて居る。薩摩屋敷の近傍には官軍の兵隊がひし〜と詰めかけて居る。實に殺氣陰々として、物



江戸開城談判 結城素明筆

凄いほどであつた。然るに西郷は泰然として、あたりの光景は少しも眼に入らぬものの如く、談判を終へてから、自分を門の外まで見送つた。自分が門を出ると、近傍の街々に屯集して居た兵隊はどつと一時に押寄せて來たが、自分が西郷に送られて立つて居るのを見て、一同恭しく捧銃の敬禮を行つた。

此の時、自分が殊に感心したのは、西郷が自分に對して幕府の重臣たるだけの敬意を表し、談判の時にも始終座を正して、手を膝の上に載せ、すこしも敗軍の將を遇するといふやうな風が見えなかつたことだ。その度量の大きいことは、いはゆる天空海濶で、見識ぶるなどいふことは、固より少しもなかつた。知識の點に於ては或事柄は自分の方が上で、外國の事情などは却つて自分が話して聞かせた位だつたが、その氣膽の大きいことに至つ

ては、絶倫と謂ふべく、議論も何もあつたものではなかつた。

(氷川清話)

二八 南洲遺訓

西郷南洲

事大小となく正道を踏み、至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支ふるときに臨み、作略さくろくを用ひて一旦その差支を通せば、あとは時宜次第工夫の出来る様に思へども、作略の煩きつと生じ、事必ず敗るゝものぞ。正道を以て之を行へば、目前には迂遠なる様なれども、さきに行けば成功は早きものなり。

道は天地自然のものにして、人は之を行ふものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給ふゆゑ、我を愛する

心を以て人を愛するなり。



筆蹟
敬^シ天^ヲ
愛^ス人^ヲ
南洲書

筆 洲 南 郷 西

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡くし、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ねべし。

己を愛するは善からぬことの第一なり。修業の出来ぬも、事の成らぬも、過を改むることの出来ぬも、功に伐り驕慢きょうまんの生ずるも、皆自ら愛するがためなれば、決して己を愛せぬものなり。

命もいらぬ、名もいらぬ、官位も金もいらぬ人は始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなり。

曾我兄弟
十郎祐成
五郎時致

道を行ふ者は天下舉つて毀るとも足らずとせず、天下舉つて譽むとも足れりとせず。自ら信ずること篤きがゆゑなり。天下後世までも信仰悦服せらるゝものは、只是一箇の誠なり。古より父の仇を討ちし人その數擧げて數へ難き中に、獨り曾我兄弟のみ、今に至るまで兒童婦女子までも知らざる者のあらざるは、衆に秀でて誠の篤き故なり。誠ならずして譽めらるゝは、僥倖の譽なり。誠篤くば、たとひ當時知る人なくとも、後世必ず知己あるものなり。(南洲遺訓)

師範國文第一部用卷一終

文部省檢定

昭和十六年十二月十一日 師範學校國語漢文教科用

昭和十二年十一月十五日 印刷
昭和十二年十二月十八日 發行
昭和十三年三月十三日 修正再版發行
昭和十六年十一月十六日 修正三版印刷
昭和十六年十一月十九日 修正三版發行



師範國文第一部用 全十册

定價
卷一、二、三、四、五、六、八、金六十錢
卷七、金五十七錢
卷九、十、金五十五錢

編者 吉田 彌平
補訂者 石井 庄司
發行者 東京市神田區神保町一丁目五番地 上原 正文
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 大日本印刷株式會社 石村 勳

發行所

東京市神田區神保町一丁目五番地
光風館
(電話 國神田三〇八七番)
(振替口座東京三二七番)

予一

本標 日本女子用

一部一子仲繁

広島大学図書

2000034759



四
子

